

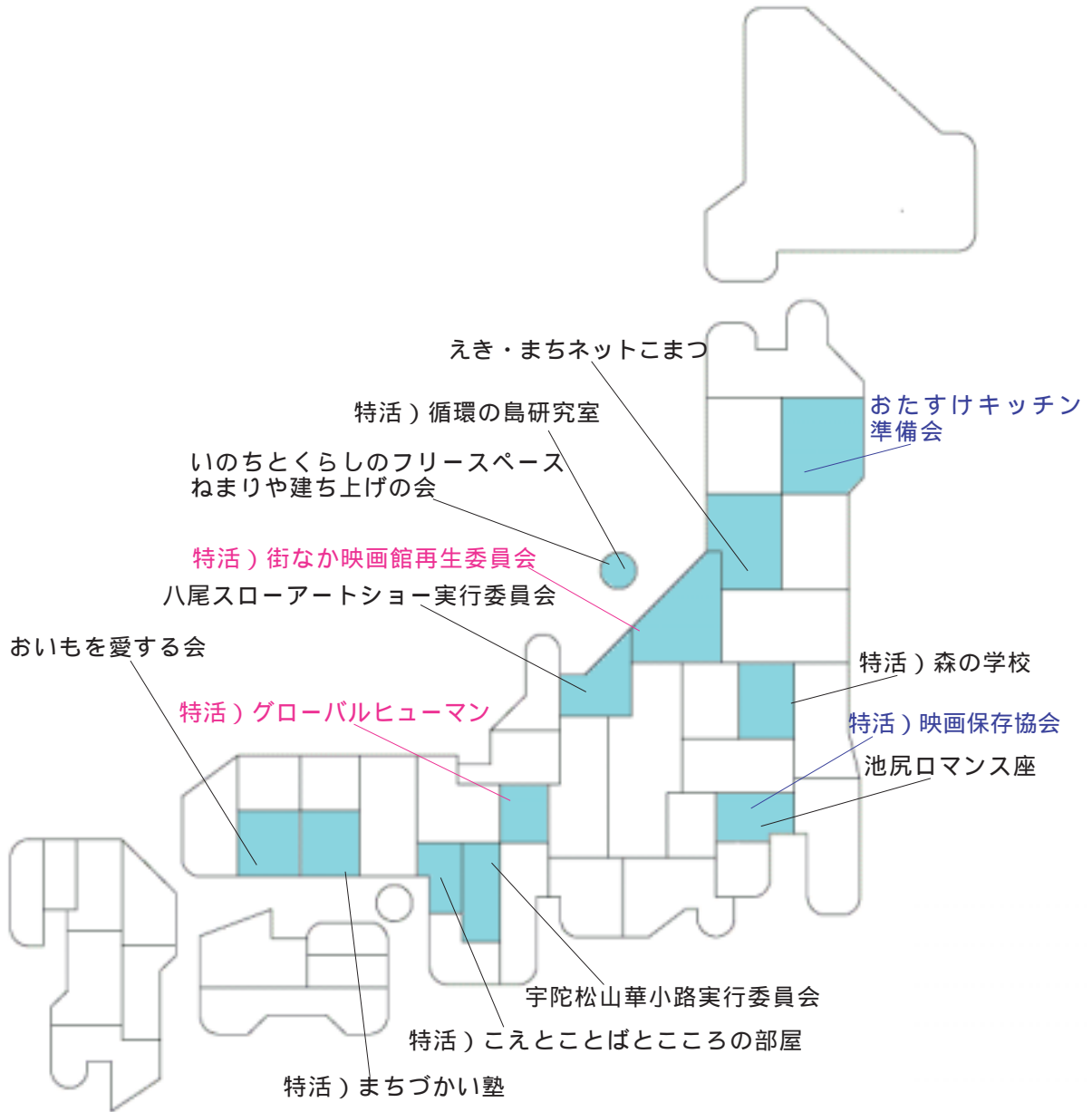
第18回

住まいとコミュニティづくり活動助成  
中間報告

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

# 助成対象団体の分布（15件）

- ・・・一般助成（10件）
- ・・・特別助成（3件）
- ・・・特別助成継続（2件）



白保村ゆらていく憲章推進委員会



## 第18回 住まいとコミュニティづくり活動助成 中間報告

<u>一般助成</u>	ページ
1. えき・まちネットこまつ（山形県川西町） 高校生が羽前小松駅から川西町の魅力を発信中！	5
2. 特定非営利活動法人 森の学校（栃木県那珂川町） 那珂川町の廃校で月島の人々と交流活動中！	9
3. 池尻ロマンス座（東京都世田谷区） 三宿の廃校で育まれている世代間交流の映像記録作成中！	13
4. いのちとくらしのフリースペースねまりや建ち上げの会（新潟県佐渡市） 佐渡の自宅の納屋を人や文化の交流拠点として改修中！	17
5. 特定非営利活動法人 循環の島研究室（新潟県佐渡市） 佐渡の旧公民館を牛耕や薪能を通じた交流拠点へ改修中！	21
6. 八尾スローアートショー実行委員会（富山県富山市） アートショーを通して八尾の旧木造校舎の活用を模索中！	25
7. 特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋（大阪府大阪市） 釜ヶ崎で生活する様々な人のまちへの関与を強化中！	29
8. 宇陀松山華小路実行委員会（奈良県宇陀市） 宇陀松山をダリアの花で彩り、まちへの関心を惹起中！	33
9. 特定非営利活動法人 まちづかい塾（東京都世田谷区） 牛窓の空き家を活用した地域の茶の間を計画中！	37
10. おいもを愛する会（広島県呉市） おいもを核として呉の住民をネットワーク中！	41
<u>特別助成</u>	
1. 特定非営利活動法人 街なか映画館再生委員会（新潟県上越市） 高田世界館発の映画デリバリーサービスを準備中！	45
2. 特定非営利活動法人 グローバルヒューマン（滋賀県高島市） マキノ町で元ホームレスらが主役の地域再生事業を展開中！	49
3. 白保村ゆらていく憲章推進委員会（沖縄県石垣市） 白保村で島おこし事業を展開する NPO 法人設立準備中！	53
<u>特別助成継続</u>	
1. おたすけキッチン準備会（岩手県花巻市） 地域の惣菜屋としてこっぽら土澤への入店を準備中！	57
2. 特定非営利活動法人 映画保存協会（東京都文京区・台東区） 谷根千工房と共同で、千駄木の蔵を活用してアーカイヴ準備中！	60

以下の報告は、各団体から提出していただいたものを基に、事務局で若干の編集を行った上で掲載しています。

# えき・まちネットこまつ（山形県川西町）

活動テーマ：町民駅を中心にしたまちづくり、ひとづくり

## 高校生が羽前小松駅から川西町の魅力を発信中！

### 【活動地域の概要】

本団体が活動する山形県東置賜郡川西町は、1955年に隣接する小松町と玉庭村など5村とが合併し現在の町となった。合併当時は3万人を超えていた人口も、2009年には1万8千人を割り、2030年には1万2千人を切ると予想されているほど急速な人口減少が続いている。

また、高齢化率も30.6%と高く、少子高齢化による限界集落が散在し、中心市街地ですらシャッター街が目立ってきている現状である。地方衰退の大波はこの町にも押し寄せている。しかし、救いもある。私たちの取り組みに触発されるように、この小松地区には近年まちづくり団体が設立され始め、私たちの他、若手商工者が組織する「NEXTかわにし」が地域おこし事業に取り組みはじめた。また、若者を対象とした未来塾「わけしゅ（方言で若者の意味）」も立ち上がり、活性化事業に関する注目度や連携の動きが向上している。

### 【団体設立経緯】

羽前小松駅は、大正15年米坂線が開通と同時に開設された。そして、羽前小松駅の管理運営は、全国初の「町民駅」として「羽前小松駅業務管理組合」が昭和57年に設立され、昨年で満28年が経過した。しかし、近年の交通事情の変化や少子化による通勤・通学生の減少等により駅利用者の減少に伴い、JRからの乗車券販売手数料が減少していることから、町の財政負担増が続き、そのままの形で運営を継続することは、極めて困難な状況となった。また近年、羽前小松駅の機能として、公共交通サービスだけでなく中心市街地の拠点施設としての機能や町の玄関口としての情報発信、物産品の販売、都市との交流拠点等多角的な利用活動が期待され、住民が主体となり行政が支援する体制が求められてきた。

「えき・まちネットこまつ」は、駅を拠点とした地域住民主体のまちづくりや地域づくりを推進するための組織として設立された。この駅は、公共交通機関としての機能だけでなく、町の玄関口・中心市街地の拠点施設など多面的な役割を担う駅として再スタートをきった。私たちは、コミュニティー機能・まちの窓口機能・地場産品の販売機能・交通サービス機能を担うと共に、地域住民の教養向上や生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与するとともに、行政並びに学校を含む多種・多様な団体等との協働を推進したまちづくりを広域的に展開することを目的とした団体である。団体の特徴は、会員を募って、駅を利用した事業（イベント等）の企画や運営に参加してもらい、町民駅が世代を超えたにぎわいの場となるよう、地域内の交流を重点的に展開していきたいと考えている点である。

2009年 8月 1日 設立準備委員会

” 10月 1日 設立

2010年 2月 11日 設立総会

<http://www5.omn.ne.jp/~eki-mn-7/index.html>



## 【活動の進捗状況】

### 1. まちむら交流事業

4月3・4日(土・日)

山形県最上郡戸沢村 角川の里自然環境学校研修

出川真也氏(山形大学・大学コンソーシアムやまがた・最上川学・准教授)のご指導を仰いで地域学の研修。杉間伐や表皮剥ぎなどの体験や活動紹介、昔語りや山菜中心の地場料理試食などを行った。最後に、地域学の調査方法を学び、地域の宝発掘の仕方を入・物・文化の視点から収集することを学ぶ。

5月10日(月)

福島県会津若松市研修

会津市役所 商工観光課主幹 赤松由美子氏から、七日町駅やまちなかショップなど。会津若松市内の活性化について学ぶ。

5月22日(土)～

交流農園「ごっつおうさま」の管理

都会と農村の交流に向け、有機栽培の野菜農園を「ごっつおうさま農園」と命名し、耕起、畦立、定植などを終了。栽培野菜は、なす・トマト・ピーマン・シシトウ・パプリカ・食用ホオズキ・枝豆・大豆・紫蘇。除草など定期的な栽培管理を行う。

6月27(日)・7月19日(日)・8月休み・9月12日(日)

南陽志立だかしや楽校(月1回ペースで)高千穂大学の松田道雄教授提唱の「だかしや楽校」に年間を通して参加し、交流方法の研修や他地区他県との積極的な交流を検討する。

7月25日(日)

東京都千代田区神田楓ビルのオーガニックショップ「カーサノーバ」との産直店出店交渉、渋谷公園アースデイの視察(NPO法人コドモ・ワカモノまちing)。

8月5～7日(金～日)

まちむら交流開催。2泊3日で「ごっつおうさま農園」での収穫や栽培管理、搾乳体験や地鶏の職長処理、有機稲作田での除草や生き物調査、米粉うどん講習等を実施。その他にもまちづくり講習や総括ミーティング、食育人形劇鑑賞など充実した交流を実施し、参加者にも好評だった。宿泊は置賜農業高校蓬田寮と川西町体育館宿泊研修所A I K。参加者は東洋大学学生4名、東海大学学生3名、香川県坂出市職員1名、千葉県大学職員1名、千代田区NPO1名の他、山形市NPO支援センターから1名、置農卒業生(えき・まち)8名、えき・まちネットこまつ理事・職員6名、置農生7名の32名

8月28～30日(土～月)

第2回全国観光プランニングコンテスト「観光甲子園」大会参加と交流

まち活性化と観光資源の発掘をめざした大会に、置農生が参加し見事優勝(グランプリ・文部科学大臣賞受賞)をはたす。県や町などの公共機関、マスコミや観光関係者、町民や県民に注目をされると共に、今後の商品化に期待が集まっている。

9月12日(日)

山形県社会活動推進フォーラムへ事例報告と参加

山形市の遊学館で開催された同フォーラム「NPO部門別テーマお見合い会」活動事例発表を行いながら、県の社会貢献助成事業等の申請法や活用法を話し合う。

9月25日(日)



### 「観光甲子園」グランプリ受賞町民報告会

受賞プラン「井上ひさしの故郷を歩く～卵下駄（たまげた）！かわにしまちなかめぐり～」のプレゼンを町民のみなさんに披露し、受賞報告を行った。参加人数 70 名。

9月28日（火）

JR 東日本への観光甲子園優勝報告と商品化の相談会

仙台支社に米沢駅長と赴き、受賞プランのプレゼンを行い、受賞報告をおこなった。また、商品化する場合の課題と解決方法をご指導いただいた。

10月3日（日）

だがしや学校新潟市遠征・・・新潟市巻地区で行われただがしや楽校の取組みに参加

各地のだがしや楽校との交流、だがしや楽校の手法研修と実際など学ぶ。「だがしや」はものを売るといより、その人の得意分野や技術、考えを不特定多数の前で披露するというものらしい。また、この体験や成果をレポートし書きためて記録集もつくる。一種の綴り方教室の意味合いももつ。



## 2. 町民駅のコミュニティー化と交流の拠点化

4月1日（木）

駅業務受託開始式

これまでの町民駅業務管理組合を解消して、「えき・まちネットこまつ」が駅業務受託。団体としてスタートを切った。

4月10日（土）～毎週土曜日

交流拠点事業として毎週土曜日午前10時～13時まで開催される置農駅前産直店「ぼ～の」。4月から10月まで、約30回開催される。ただし、今年度は東北大会準備や観光甲子園後の取組みのため、8月以降は不定期開催。

4月25日（日）

イベント駅長お披露目・やまがた花回廊観光キャンペーンイベント列車お出迎え。同キャンペーンは4月から6月まで、JR 東日本と県、置賜地区3市5町と上山市が連携をとった観光開発事業として実施され、羽前小松駅でも本団体や町および町観光協会が連携事業として実施した。

6月1日（火）レンタサイクル供用開始

町の自転車商業組合から供用を受けた自転車5台を常備して、レンタル事業を開始。

6月5日（土）

多機能駅イベント「和（なごみ）カフェ」駅のコミュニティー化や交流拠点としての機能を果たす目的で、住民が集える駅、集える機会の提供に「無料カフェの提供」を提案。カフェは常時設置するが、今回は第1回として“野点”を企画した。

7月10日（土）

和カフェタ暮れバージョン

スペシャルイベント第2回として、絵本の読み聞かせと昔語り部を開催。



## 3. まちづくりに向けたイベントや産直店の開催

4月10日（土）～毎週土曜日

置農駅前産直店「ぼ～の」開店・・・毎週土曜日午前10時～13時

5月3日（月）

高畠ワインスプリングフェスタ産直店・活動紹介



5月8日(土)  
 合同朝市「こまつ市」・・・毎月第2土曜日朝7時～9時  
 5月～11月開催  
 6月26日(土)  
 まちなかショップ「だり庵」オープン記念イベント  
 9月5日(日)  
 婚活イベント「米粉うどんとスイーツ作り講習会」  
 10月9日(土)  
 高畠ワイン秋の収穫祭産直店・活動紹介



#### 4. 特産品開発と総合産業の起点

6月2日(水)  
 冷たい三色大福開発用クリーム分離  
 7月6日(火)  
 冷たい三色大福「百恋(ひゃっこい)」発表会  
 7月15日(木)  
 特産品「サクランボフルーツソース」製造  
 7月25日(日)  
 千代田区神田産直店開店交渉  
 7月27日(火)  
 百恋製造講習会および特産品検討会

#### 5. 次世代育成の取り組み

5月30日(日)  
 第1回えき・まち元気交流塾

#### 6. 情報発信に向けた各種事業

インターネットHPの開設  
 「えき・まちかわら版」の発行  
 イベント告知の励行  
 マスコミ報道



#### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

- ・交流事業が当初予定より質量とも多岐にわたる
- ・特産品開発に向けた取り組み成果が当初予定を上回る

#### 【今後の予定】

- ・平成22年10月30日(土) 和カフェ 夕暮れバージョン 歌声喫茶
- ・平成22年11月11～13日(木～土) グリーンツーリズム全国大会交流
- ・平成22年11月20・21日(土・日) 全国農業高校収穫感謝祭交流
- ・平成22年11月27日(土) 第2回えき・まち元気交流塾
- ・平成22年12月18日(日) クリスマス交流
- ・平成23年2月 第3回えき・まち元気交流塾
- ・平成23年3月 まちむら交流



# 特定非営利活動法人森の学校（栃木県那珂川町）

活動テーマ：月島・健武 もんじゃでどんなもんじゃ

## 那珂川町の廃校で月島の人々と交流活動中！

### 【団体設立経緯】

森の学校は、1993年に“ハックルベリーくらぶ”として環境教育を主軸とした自然体験ツアーから始まりました。そして、1994年にカナダ独自の自然観に基づいたプログラムにふれ、その後、現在まで、日本独自の自然観に基づいた環境教育のプログラムを開発・実践しています。活動の舞台として、1995年に、群馬県南牧村の廃校を年間を通して借り受け、「廃校とその周りの自然」を舞台とした環境教育のプログラムを実施。また2001年には福島県の博覧会「うつくしま未来博」で“「森のネイチャーツアー＆森の学校」”というパビリオンを企画運営しました。地元の人247名を自然案内人として育成。独自のプログラムによる研修を重ねたガイドは、現在でも県内で活躍しています。2010年からは栃木県の鹿沼市と那珂川町の里山の木造校舎（廃校）を借り受け展開しています。

\* \* \* \* \*

森の学校の設立当初から活動の舞台は“里地里山の木造で歴史のある校舎とそのまわりの自然”です。学校の校舎は、その地域の大切な子どもたちの学びの場であり、地域のかたにとって思い入れが深い場所であり、地域のコミュニティの場です。一級の木材と技術で造り上げられている建造物です。木は大切に使い続けられれば数百年もつといわれています。こうした貴重な木造の建造物を活かし残していきたいという強い思いを持っています。

森の学校を開校した背景には、当時の社会状況があります。それは、子どもを取り巻く環境の悪化です。第一に登校拒否や家庭内暴力にいじめなど、未来を担う子どもたちへの直接的な危機です。第二は大人社会の問題です。地下鉄では若者は争うように席に座り音楽を聴きゲームを始め、中には食事をする者もいます。優先席も例外ではありません。地方に目を向けてもさほど代わりなく、パチンコ店の極彩色のネオンが不夜城のごとく輝いています。このような環境の中、子どもの健全な育成が阻害されていました。未来を担う子どもが危険にさらされているということは、人類の未来が危機に瀕しているということであり、この課題解決が森の学校開校の大きなきっかけです。

ある集まりで、東北から参加してきた作家から、とんでもない話を聞きました。「私の町では、都会から大勢の子どもたちが自然体験にくるといので、町の職員や地元の人が総出で川底にブルーシートを敷き詰めました」といのです。「どうしてですか？」と尋ねると、「川底の石で足を切ったり、つまづいたりしては町の責任となって困るからです」といのです。これはまた別の会で聞いた話ですが、「私の町にはとても美しい川がいくつもあって、昔は子どもたちだけで泳いだり、魚を捕ったりしていました。ところが、今、子どもは川で遊ぶことができないのです。親は仕事で忙しく、学校の先生も何か事故でもあって自分の責任になるのを恐れて川で遊ばせないのです。更に驚いたのは「その学校ではそんな自然豊かな川がすぐ側にあるのに、ピオトープをつくったのです。高額の予算を使って都会の業者がつくったそのピオトープには、やはりどこからか仕入れた水生植物や高級魚が



泳いでいるのです。このピオトープで、子どもたちは何を学び、何を感じ取るのでしょうか？

こうした大人たちの行為は、今や日本中に散在しています。都市も地方も変わりありません。背景にあるのは「想像力の欠如」だと考えます。私たち大人が「子どもの未来」について、20年、50年、100年先までを“想像”し、そのためにどうしたらよいかを正しく“考え”、子どもたちのために“行動”することがとても重要です。「子どもの未来」とは、「地球の未来」です。その「地球の未来」について、子どもも大人も共に“学ぶ”最適の舞台が「里地里山の木造校舎」だと考えます。学校の校舎は、人を学ぶ姿勢にしてくれます。まわりの自然は、想像力をかきたてる宝庫です。

\* \* \* \*

自然を舞台とした自然学校の環境教育の原理は、“学ぶべきは人からではなく、自然から直接学ぶべきである”ということです。人は、悪意がなくても過ちを犯してしまいます。しかし、自然にはそのようなことはありません。常にそこに在るのみです。自然の中には多くの学びがあります。“1粒のタネが大木となり、朽ちて土に還り、再び他の生命の源になっていく”こうした数十億年というはるかなる自然の仕組み。人が自然を全て理解するなど到底不可能であり、自然の本当の意味を人が人に伝えるなど出来ようがありません。しかし、“人が自然に近づき、また、その自然から学ぶべき立ち位置、すなわち時間軸・空間軸でより近いところに案内するという補助はできる”と考えます。これが、森の学校の環境教育です。

この考えは、自然を客体化し、客観的に捉えていこうとはしていません。哲学用語の“止揚”という概念に近いものです。止揚とは常に自分がこうありたいと想像力を働かせ、その存在へ、未来の自己へ投機し続けることです。このときに働く動力ともいべきものが“想像力”です。この想像力が大切だということは拙著『田んぼが学校になった』（岩波書店）でもふれています。（以下引用）『本来、環境教育は伏流水構造を持つものです。そこで学んだことは人間の意識の中であって普段はあまり表面に出てこなくても、何か大切な判断をしたりする時にその判断や決定の指標となる重要なものだと思います』

このように、環境教育で得られるものは、伏流水構造として人間の根底に宿るからこそ重要なのです。地球消滅の核兵器のボタンを押すか押さないかの選択までいなくても、YESかNOかの選択を私たちは常に行なっています。更に将来大きな選択をしなければいけない時がきたとき、何を選択するかは、その人の原体験であり、価値観であり、指標が重要となります。

自然に学ぶことから想像力を持つという根源的な意味は“自然のなかに在るものには何ひとつとして不必要なものは無く、どれひとつが欠けても、それらの生命体は維持できない。それほどに生命とは繊細かつ巧妙なものである”ということです。

南方熊楠は、粘菌という微細な世界を見つめることで神社森を守りました。今、その粘菌は最先端の“技術”を起こそうとしています。物理的、科学的思考からは生まれえない新たな“思考=想像力”がこの粘菌をヒントに注目されています。思考する器官を持たないアメーバのような生命体が“思考”するというのです。私たちは、自然について多くのことを知らないという前提に立つことはとても重要なのです。自然に謙虚になることです。また、自然から多くのことを吸収しようと意欲的になることです。私たちの学びの原点の場は「学校」だと考えます。

\* \* \* \*

1994年にカナダのパークワーズン（国立公園のレンジャー）に会ったとき、日本人である私は彼らと相通じる自然観を持っていると感じました。それは、「自然への“畏敬の念”」です。彼らに、彼らが日々実践しているプログラムを、私が「インタープリテーションか」と聞くと、「いやそうではない、アプリケーションだ」と答えました。「カナダは、イギリスやアメリカと違って、自然がとても厳しい。自然を征服したり、開発して人間の思うがままにしようなどは考えない。自然と共に、自然の懐で、生かしてもらおうという考え方だ」と応えたのです。これには日本人である私にも合点がきました。長い年月をかけて日本人が築き上げてきた日本独自の文化には、こうした哲学が内在しているのです。

縄文人は自然を学び、自然のサイクルに合わせ、自然の恵みを活かし暮らしていました。那珂川町には、縄文の遺跡が発見されています。この地で、私たちは30数年間耕作が放棄されていた谷津田を開墾し、古代米を育て収穫しています。この田んぼの授業には、東京や埼玉、千葉から親子が参加し“その自然の恵みの奥深さ”を実感しています。沢の水と土とまわりの森の恵みと、多くの生きもので育ったお米を得るという感動は、大切な記憶として心に残ります。この授業は学校の教室から始まります。まず授業のテーマを学び、自分たちの達成したい目標を出し合ってから始めるのです。そうすることでプログラムの内容がより充実し、食前の“いただきます”という言葉にも一層深い意味を持つことになります。

\* \* \* \*

私たちはあのアウシュビッツの悲劇を、第二次大戦末期の沖縄戦の残酷を、広島・長崎の原爆投下を防ぐ“想像力”を持つ子どもが一人でも多く育っていったと願っています。その“想像力”は、自然の中、体験の中から芽生えてきます。それは、小さな生きものにも大切な生命が宿り、自分も同じ地球上に生をもつ生きものであり、存在するという価値では全く同等なのだという事。世の中に無駄な命はないという事。それがこの地球の未来をつなぐ大きな原動力となります。私たちはあらゆる機会を通じて、この実践をこれからも続けていきたいと考えています。



## 【活動の進捗状況】

### 1. 遊休農地で小麦の収穫と粉ひき

学校の校舎前の遊休農地で、実験的に小麦を育てました。この粉が、将来は月島のもんじゃ用の粉に使われていくようになることを願いながら。

無農薬で化学肥料も使わず、春になってから育てたので、地元の方々も興味津々。小麦畑の手入れをするたびに、地元の方々も除きに来て、「この前、芽が出ていたよ」などと会話がはずみます。

当初、収穫自体を心配していましたが、大方の予想を裏切って、大量に収穫することができました。とはいえ、播種自体が少なかったため、重さにして2キロです。しかし、これほどまでに育つとは地元の農家の方も驚かれました。

私たちの活動には、学校のまわりの方々も、とても温かく見守ってくれています。こんな挑戦が少しでも地元の方々に伝わっていったらと思います。冬には、少ししかできなかった小麦の粉を使って小さいもんじゃを月島の皆さんと試食したいと思います。

### 2. 子ども交流キャンプ 7月18日(日)～19日(月) 1泊2日

那珂川と月島の子どもたちの交流キャンプを、7月18日(日)から19日(月)の1泊2日で、森の学校「那須・ながわ校」で開催しました。開催にあたって、那珂川町の後援と、那珂川町教育委員会の後援をいただき、川遊びのライフジャケット等も教育委員会から提供していただきました。また、メインプログラムの学校校庭での“月島の巨大もんじゃを那珂川で！！”では、地元の育成会のお父さんお母さん方にご協力をいただき、大成功！100名もの人々が集まり、地元ケーブルテレビや、地元新聞、那珂川町の広報課の方々にもおいでいただき、賑やかに開催しました。

学校の校舎裏の30数年間耕作を放棄されていた谷津田(棚田)を、森の学校が開墾・再生し、今年から稲を育てています。その谷津田の“温水田”は子どもたちに大人気です。通称“トンボ池”と呼んでいるのですが、谷津田の再生とともに、様々な生きものたちがやってきて、生きものたちの宝の池になっています。校舎からこの谷津田へと向う道、田んぼ、沢、トンボ池ともに、最高の自然観察エリアです。

また、鮎の川として有名な武茂川での“川ガキ体験”は、日常、川に囲まれて生活しているけど見るだけで川の中へ入ることがない月島の子どもたちにとって感動と驚きの連続だったようです。地元漁業組合の支部長さんから川の話をつたえ、早速川の中へ。川の中の茂みを探ったり、石をひっくり返したり・・・、川の中の生きもの探しにもうすっかり夢中です。川のおだやかな流れの中での“川ガキ体験”は、とても印象深く、楽しい体験だったようです。

そんな月島の子どもたちを地元の少し年上の子どもたちがとても上手にリードしていました。これは、今回の交流キャンプの大きな成果のひとつでした。こうした子どもたちの交流が大人になってからも続いたり、まわりの大人たちにも広まっていくればと思います。

今回のキャンプのもうひとつのねらいは、“月島の巨大もんじゃを那珂川で！！”でした。地元の協力度ですが、これも予定以上の100人もの人々が集まり大変な賑わいでした。

地元育成会のメンバーを中心に、学校の給食室を使いながら、女性のサークルや地元農家の方々のご協力で、森の学校の校庭に、長径2.5メートル、短径1.5メートルの楕円形の超大型もんじゃが出現！！大成功でした。

財団の大内さんからご挨拶も頂き、栃木県では初めての助成事業となったことの報告を頂きましたのは、誠に身の引き締まる思いとなりました。一方月島からは、もんじゃ振興会の村田会長のご尽力でブルドックソースからもんじゃ用のソースなどのご協力も頂き、校庭には“月島もんじゃ”ののぼりが立ち並びました。月島から参加した子どもたちは「もんじゃ」をととても誇りに思い、那珂川の子もたちに話をします。そのもんじゃを月島と那珂川の子どもたちは一緒にほおばり、そのうち追いかっこをして遊びだし、廃校にほほえましいコミュニティが復活しました。



3. 生物多様性条約第10回締約国会議（C O P 1 0）開催を記念した“命のつながり＝生物多様性”をテーマとした写真展開催

当初の予定では利用できるかどうか分からなかった“銀座プロムナードギャラリー”を借りる事ができるようになり、急遽その事業を組み入れました（その分、炭のプロジェクトの予定は、来年以降に順延しました）。

この写真展では、私たちNPOのテーマ“命のつながり”を支えているのが“生物多様性”であるため、この時期を外しての開催はありませんでした。貴財団のご理解をいただき大変感謝しています。写真展では、写真と合わせて生態系のイラストも展示して、生物多様性について、理解を深めることができる内容となっています。

月島の今回の交流事業の中心人物のおひとりである月島西仲通り商店会の小林会長さんも早速ご覧頂き、“那珂川・月島の交流キャンプの写真よかったよ！”と電話をいただきました。その後、銀座を中心に様々な方々から“子どもたちがイキイキしていてもよい写真展だよ”というお声を頂いています。

「森の学校の一年間（四季）」写真展

撮影：佐伯剛正 / 館野二郎

協力：財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団  
ソフトバンククリエイティブ株式会社

会期：2010年9月18日（土）～10月16日（土）

於：銀座プロムナードギャラリー（ギャラリースペース7箇所）

展示写真：81点

イラストパネル：20点

【想定外の事柄、当初予定との相違点等】

- ・夏の高温など天候不順の為、ハクサイやキャベツなどの苗の定植ができず遅れてしまい、秋の植え付けとなってしまいました。現在、ハクサイの定植は終わっていますが、キャベツは11月の初旬に予定しています。
- ・生物多様性条約第10回締約国会議（C O P 1 0）開催を記念した“命のつながり＝生物多様性”をテーマとした森の学校の写真展を開催。月島の方々と地元中央区の人々など多くの方々から反響を得ることができました。

【今後の予定】

「月島のもんじゃを作るときの野菜クズをコンポストで堆肥にし、那珂川で野菜（キャベツやハクサイ）の苗を育て、育った野菜（キャベツやハクサイ）をもんじゃのお店で使う」こんなストーリーを実験しています。当NPOが提案させていただいた後に、もんじゃのお店が加盟している振興会で生ゴミの堆肥化については計画があがったようですが、回収システム面などで実現には至っていません。まずは、小さな試みから実現していきたい、との思いは会長も私たちも同じで、この試みがいずれは全てのお店に広がっていくことをねらい実施します。

また、那珂川の竹で作った竹炭を粉にして、それをもんじゃに混ぜ“竹炭もんじゃ”、森の学校で今年収穫できた古代米なども粉にして“古代米 米粉もんじゃ”にできたらと考えています。こうした取り組みには、もんじゃのお店の足並みが揃わないとできないことですので、時間がかかる問題がありますが、「まずは、

できるかたちで、できることからやりましょう」。「月島で提供するのはイベントの時がいいですね」などと、会長と話をさせていただきながら、一步一步前進できるように、交流を深め合い、お互いの信頼を築いていこうとしています。



# 池尻ロマンス座（東京都世田谷区）

活動テーマ：映画のような「まち」づくり～映画で地域の活性化を

## 三宿の廃校で育まれている世代間交流の映像記録作成中！

### 【活動地域の概要】

世田谷区は、東京都の南西側に位置し、神奈川県に隣接した人口約85万人の区です。

活動地域である池尻地域は、東京都世田谷区の東部に位置し、目黒区、渋谷区に隣接及び近接しています。地域は、国道246号線により分断されており、閑静な住宅街が広がり、区内でも比較的大きな世田谷公園が地域内にあるため、居住環境に恵まれた地域といえます。

終戦まで、国道246号線の南側のほとんどの区域を陸軍の練兵場が占めていました。そのため、陸上自衛隊の三宿駐屯地（自衛隊中央病院など）や池尻小学校、池尻中学校（統廃合、後のIID）、世田谷公園、国家公務員官舎など国や東京都の建物が集中して地域に建築されています。



### 【団体設立経緯】

「池尻ロマンス座」の設立は、統廃合となった池尻中学校の廃校跡地プロジェクトとして開校した「世田谷ものづくり学校（IID）」にて、隣接する池尻自治会とIIDにて地域活性化の一環として、「名画交流会」を始めたことに端を発しています。

クリエイターの集まる場所として、若者中心とされていたIIDを、地域住民との交流の場として活用すべく、池尻自治会とIIDが協力して2005年10月から半年ほど開催しました。

しかし、平日の昼間開催だったため、諸々の問題点が浮き彫りになり、これを踏まえ、2006年7月から「池尻ロマンス座」として改め、再スタートをしました。

新たな映画会は、周辺地域に住む「地域活動に関心を持つ若者」と、「家庭に引きこもりがちだが元気な高齢者」の間で、名作映画の鑑賞やレクリエーションを通しての交流を図り、IIDを池尻地域のコミュニティの一つの核としていくことを目指して立ち上げられました。運営メンバーは、それぞれ「映画」「高齢者」「地域」等の異なるキーワードに興味を持ち、IIDに関心のあったボランティアメンバー等が中心となり、この場に集まりました。

従来、こういった活動は「時間に余裕のある若者が無償のボランティア活動としてお年寄りの面倒を見る」といった見方で語られがちです。しかし、ロマンス座の活動の一番の特色は、「ボランティア」を「無償で時間と労働力を提供する」という一般的なイメージで捉えるのではなく、本来の意味である「自発的な活動」として行う点です。この事が、少しずつ違った目的を持つメンバーのみならず、ばらばらな地域住民が交流することにつながるための条件だと考えました。

現在は若者が運営し、高齢者をターゲットとしているものの、高齢者を「お客様」扱いが目的ではありません。運営メンバーは「高齢者を楽しませること」と同時に「自分たちも楽しむこと」を考え、いずれ高齢者にも運営側として参加してもらう方針です。一方が享受するだけの関係ではなく、お互いに出ること出来ないことを補完しあう関係こそ、地域コミュニティの基本ではないかと考えています。



## 【活動の進捗状況】

### 1) 映画づくりについて

映画づくりのための議論（はじめの取っ掛かり編）

まずは、メンバー間でのコミュニケーションと告知機能を兼ね、映画づくり用のメーリングリストとブログ「映画のようなまちづくり」を開設した。（4月）

メーリングリストでのやりとりを経て、第一回目のミーティングを行った。

当初の目的は、「いつもの活動（映画会、交流会）の中で、先輩方（以下、ロマンス座内での高齢者の呼称）の若い頃の恋愛や当時の結婚の話など、私達に想像できない貴重な体験談を聞き取り、ドキュメンタリー映画をつくる」というのが主旨だった。

しかし、議論していく中で、当初の予定として考えていた「台本づくりワークショップ」のための聞き取りテーマが絞りづらく、テーマづくりを進めることが困難であった。

打合せの回数を重ねる中で、助成を受けることができた理由『映画をつくるにあたり「住民との交流により、更なるまちづくりの活性化に繋がっていく」ことが期待されている。』という点に着目するに至った。ロマンス座はそもそも廃校になった学校を再生して、その一画で活動している。学校は「まち」の拠点とも言えるので、『学校』をテーマに聞き取りの内容を膨らませたらどうだろう・・・という方向性が決まった。

老若男女、皆若い頃は学生だった、『学校』にまつわるエピソードを聞き出していこう。その中には恋愛もあるだろうし、昔の遊び、昔のいじめ事情などなど、我々の時代とは違った話を聞くことができるかもしれない。5月の上映映画は「学校2（山田洋次監督）」ということもあり、上映後の交流会では、『学校』をテーマに聞き取り調査を行うことに決めた。

### 聞き取り調査（キーワード『学校』編）

5月、映画「学校2」の上映後にお茶会を開き、聞き取り調査を行った。キーワードは『学校』。お菓子を配り、お茶を飲み、先輩方に『学校』にまつわるエピソードを聞いてみた。「小学生時代の　さんはどんな子供だった？」といった具合に。

先輩方の学校時代は、戦争と重なるため、苦労話が多く、中には語りたがらない方もいた。主に聞き取れたエピソードはこんな感じだった、

「あの頃は部活動がなく、授業が終われば山で食べられる野草を探し、家で子守をした。」

「戦後、給食で初めて脱脂粉乳とパンを食べた。美味しくなかった。」

「家族の食べ物が足りないため、夕飯時は兄弟の中から1人だけ親戚の家へ行かされて食べた。切なかった。」

「給食費を払えないクラスメイトが給食の時間になると教室を出て1人泣いていた。」 など

先輩方の学校時代は、子供なりに毎日生きることに精一杯だったという印象を感じた。

また、交流会のメインであった、カメラを向けての聞き取り・インタビュー自体が難しいことが判明した。私達のインタビューとしての技量もあるが、先輩方がカメラを向けて「映される」という意識も影響しているのではないかということを感じた。

### そしてまた議論（暗中模索編）



映画づくりがなかなか進まず、反省と検討の日々が続く中、ふとスタッフの1人から、「そもそも、なぜ映画をつくるのか？」という根本的な話があがった。

メンバー間で目的意識のズレが生じてきたということだった。映画を見ることを通しての交流には経験がある私たちでも、映画をつくるということに関しては、経験したことのない世界。そもそも私達は助成を受けて、何がしたかったのか・・・

原点に立ち返ることが必要だった。それは、「活動を通して、記録に残せる映像を作りたい」そして、「IIDを拠点として地域に告知・上映を行うことで、情報発信をすることができないか・・・」ということだった。

#### 聞き取り調査（何気ない会話編）

6月。交流会にいつも参加してくれるお婆の誕生日を利用して、誕生会を開いた。映画「東京物語」後に、誕生会自体を交流会で行うのが初めてだったこともあり、キーワードに縛られないようなフリートークの場を作った。スタッフが自前で誕生日のためのケーキも作った。結果、上映した映画を通し、先輩方が様々な話をしてくれた。例えば、

「やっぱりあの時代の映画はいい。我々には映画のテンポがあう」

「複雑な話でないから頭に入りやすい。最近の映画は複雑な話が多いから・・・」

「昔の人は、今に比べて足が太めだったのぉ～」なんていう感想も。

これを機に、普段の何気ない会話は、世代間交流のひとつのカタチなのではないか？いつもの活動を撮り続けていくこともドキュメンタリーとして扱えないだろうか？といったアイデアがメンバーからあがった。

先輩方を対象とした映像ではなく、世代間交流を自論む私達の姿を映像として記録していく。

それとともに、交流会自体にもひと工夫加えることで、全体の流れを通した話の中にスパイスを加えることができる。そのようなアイデアも。

そもそも、私達は、様々な目的をもって集まったメンバーなので、活動に対する思いもそれぞれだ。結果的に個人に的を絞れば、映し出される姿も様々になる。なので、いつもの活動の風景の他に、各々のメンバーが今まで活動してきたことを踏まえ、「こういう交流会をやりたい」という企画を募集することになった。その企画を考えた動機、そしてそれを実行する姿を記録することによって、世代間交流・地域交流、そして地域活性化といったものが描き出すことができないか？というのが、映画づくりの核となった。

映画づくりの活動内容が、芯のぶれない中で微妙な変化をしているが、徐々に映像の全体像が見えてきた。

#### いざ映画撮影へ

いつもの活動の撮影を続ける中、メンバー内で交流会についての企画を募集した。2人から、今まで行ったことがない、下記のような楽しい交流会の企画案が持ち上がった。

#### A.「即興で、皆で輪になって、お話を作る」ワークショップ

即興劇の1つ「シェアド・ストーリー」を、皆で輪になって、1人1行ずつ話を作っていくゲーム。先輩方の全員に話は聞けな



いが、先輩方から出た1行の文章でどういう話を作っていくか？老若男女合せ、自分たちだけのストーリーが作れたら、それだけでも思い出になる。そんな考えからの企画である。

#### B.「後世に残したい」思ひ出の曲「世代を超えて共に唄おう」ワークショップ

私達が高齢者になった時に、歌詞を見なくても伴奏が流れてきたら、皆で歌えるような唄はあるのだろうか？先輩方の口ずさむ思ひ出の曲を私達も一緒に唄い、その歌詞にまつわるルーツや情景を覗くと共に、自分達の大事にしていきたいメロディについても語り合ってみる。歌を通して話が広がりそうな企画である

10月以降、これら2つのワークショップを行う予定である。告知や更なる議論を行い、企画を考えた2人の思いや実行する姿を通して、世代間交流などの映像を撮りたいと考えている。

#### 2) 広報関係

- ・ブログ「映画のようなまちづくり」を開設。参加メンバーや活動の進捗などがわかるような構成とした。また映画づくりと同時にいつもの交流会の活動や、廻りの先輩方の話題なども記している。随時更新中。
- ・チラシによる毎月の映画会の告知も随時行った。10月のワークショップ「即興で、皆で輪になって、お話を作る」について映画と共に告知。
- ・参加者は、交流会を含め、4月(約20人)、5月(約10人)、6月(約25人)、7月(約15人)、8月(約20人)、9月(約30人)

#### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

- ・高齢者への聞き取り、特に「青春」・「学校」といったものは非常に難しかった。理由は、
  - 1 必ずといっていいほど戦時中の話になってくるため、あまり話しをしたがらない。
  - 2 青春・恋愛といったものを表立って経験するような時代ではなかった印象を受けた。  
というのが主な理由です。
- ・映画の脚本ワークショップについて、脚本は1人でつくることが多く、数人のワークショップ形式でつくっていくことが、非常に難しいことだと、始めてみてわかりました。
- ・商店街と合同で映画祭を行う予定だったが、商店街の祭りが10月末となったため、調整ができませんでした。

#### 【今後の予定】

映画づくりについて

- ・ワークショップA(10月)実施予定
- ・ワークショップB(12月)実施予定
- ・映像編集

広報関係について

- ・映画ポスターづくり
- ・上映会の告知(地域の巻き込み)

映画祭について(2月若しくは3月の予定)

- ・上映会の開催(地域の巻き込み) 地域を映画のまちへ

#### 【その他参考となる事項】

カメラなどの記録メディアの発達で、誰でも映像を作れる機会を与えてくれました。しかし、人に見てもらった映像をつくるというのは非常に難しいことがこの半年の活動でわかりました。

ただ、この経験を通し、私達なりの方法を掴みつつあると実感しています。私達の活動は、映画を見ること・交流会以外にも、映画づくりや発表の場を通した、「地域・まちづくり」に貢献できるものと思っています。



# いのちとくらしのフリースペース ねまりや建ち上げの会（新潟県佐渡市）

活動テーマ：子どもと共にてしごとから暮らしのいのちを発掘する

## 佐渡の自宅の納屋を人や文化の交流拠点として改修中！

### 【活動地域の概要】

私達の暮らす佐渡ヶ島は広さ 855.1 k<sup>m</sup>²、人口約 6 万 4 千人の離島としては日本一大きな島です。日本海の北西部に位置し、津島暖流の影響により、同じ日本海にいながらも、越後と比較して、1～2度の差があり、夏は涼しく冬は暖かい気候で、土の幸、山の幸、海の幸に恵まれた自給率 120%と言われている島です。

江戸時代には、金山や銀山の発見により賑わいましたが、その働き手として多くの罪人達が流刑によって島に流されてきているといった歴史も刻み込まれています。しかし、単なる罪人だけでなく、政争に敗れた政治犯や思想犯といった歴史的人物も流されてきており、日蓮上人や順徳天皇、世阿弥といった人物達は、ねまりやの所在地である平泉地区に在留されており、史跡が数多く残されています。

そして、同じ時代、北前船の西周り航路寄港地であった事から、一番多い時の人口は 12 万 5 千人にものぼり、人の出入りが激しかったがゆえに、様々な地域の文化や伝統技術や芸能がいたるところにちりばめられて、今も尚残っています。

しかしながら、近代文化の波に押し寄せ、若い人達はどんどん都会へと吸い寄せられてゆき、限界集落ならぬ、限界島へと人口の減少は止むことなく、文化継承もできなくなりつつあります。

そのような状況ではありますが、ここ数年、「やっぱり佐渡が良い」と、早々に戻ってくる若者も増えつつあり、よりよい子育て環境を求める声も少なくありません。

私たちの活動拠点である平泉地区は、大佐渡山脈と小佐渡山脈に挟まれた国仲平野に位置し、所在地としては、大佐渡の山に入る少し手前にあります。

手付かずの自然と田んぼに囲まれた、美味しい清水が湧き出す山間部です。穏やかな気候であるため、リンゴやなし、ぶどうといった果樹園も点在し、山羊や牛を飼っている農家や放牧場もあり、学校の遠足で子どもたちが多く訪れます。

北前船や流入達をもたらした様々な文化が村の暮らしにも根付いており、「衣・食・住」に関するものづくり精神を、ふんだんに持ち合わせていらっしゃるのが近所のお年寄りの特徴です。

それらの文化を紡いでゆこうと、3 年前、地元の有志の手により「伝統文化と福祉の専門学校」が佐渡中心部にできました。「ねまりや」はこの学生さん達と、子ども達、そして地元の「ものづくり名人」達と共に作り上げられている次第です。

### 【団体設立の経緯】

私たちは 5 年間に渡り保育サークルとして、親子が集まり、遊ぶことを中心に活動してきましたが、子ども達が大きくなるにつれ、昔ながらの暮らしぶりがまだまだ残っているこの島で、子ども達へ伝え残していく学びを得たい！という想いがあふれ、「いのちとくらしのフリースペースねまりや」の構想が立ち上がりました。

大自然あふれるこの島で、環境や地域と調和のとれた学び多き子育てをと、地域に根ざす文化や伝統技術を媒体としたコミュニティースペースを創り出そうと動き出しました。

様々な年齢の、様々な個性を持った人々が、手しごとを通じて未来と繋がりあえる手がかりを学び、集える場となればよいと、私達は願い、動いています。



## 【活動の進捗状況】

### 建築ワークショップ（講師兼サポート隊によるセルフビルド教室）

同地区内になる伝統工芸専門学校生徒さん方を迎え、大工仕事を教わりました。若い大工さん達（20歳前後）なので、子ども達と遊びを交えながら作業を進めてくれています。職人の方では、こういった和やかな雰囲気は出せなかったように今は思っています。

#### 1) 水平出し

近所の大工さんに昔ながらの道具をお借りしました。バケツの水がホースを伝って水平をとる仕組みに子ども達も学生さん方も頭の中が「マークで、ああでもないこうでもない、と皆で理科の実験のようでした。

#### 2) 動柱

既存の柱を理想の間取りと建具にあわせて動かしました。ジャッキで桁を持ち上げる時、屋根がミシミシと音を立てるので、木造建築の構造の巧妙さは驚きです。

「家が壊れるー！」と子ども達ははしゃいでいました。

#### 3) 基礎修復

建物の位置が隣接する森よりも低い位置にあることを見学にいらしたプロの大工さんにご指導いただき、急遽基礎を足すことになりました。同じ村の左官職人さんにコンクリートの買い方から、練り方、施工に至るまでを教わりました。

子ども達も「これぞ得意技！」といわんばかりに張り切って穴掘りに挑んでくれました。大きなスコップを一生懸命に振り上げる様はなんとも微笑ましい情景でした。

#### 4) 貫の溝掘り

土壁を塗る際の小舞となる貫を挿す柱の溝をノミで掘ります。手を打たないように気をつけますが、どうしても打ってしまい、けれども掘り進む工程が楽しいのか、子どもも大人もひとりひとつずつしっかり夢中で掘っていました。ノミを打つ音が森に響き渡ると、「キツキミみたいだね～」と子ども達。子どもサイズのノミとゲンノウがあればいいのにね。

#### 5) 敷居と鴨居の取付け

これは流石に電動工具を使うので学生さん達にお任せしました。まっすぐに溝を切るのが難しい様子でしたが、古材を提供していただいているので何度もやり直すことができました。失敗作は、3月に予定しているみぞ造りの薪に利用予定。カンナくずはおまごどに使われたり、畑に撒いたりします。

#### 6) 柱抜き（トラス補強）

古材を提供していただいている地元の建設会社の方に、「トラス補強をすれば体育館みたいに柱は抜けます」と教えていただき、即実行しました。太い梁をチェーンソーで切る様には大人も子どももハラハラでした。プロの技にはいつも驚かされます。高い位置での作業なので大人の作業となりましたが、休憩の間は足場の上は子ども達の遊び場となっていました。学生さん達も初めて見る工程だったのでしっかり勉強することができました。広いスペースを確保したかったので、みんな嬉しそうでした。

### 壁ワークショップ（土壁パーティー）

同じ村の左官職人さんのご指導で小舞づくりから塗りまでを教わりました。

「土」ときくと親御さん達も、「これならできる！」と思われ



るのか、ワークショップ参加者が多かったです。2日間に渡るワークショップでしたが、やはり1日目より2日目の方が落ち着いて段取り良く作業が進みました。

### 1) 竹小舞

元々納屋にあった土壁を壊す際に出てきた小舞と、近くの荒廃した竹林から同じ寸法の竹を切り出して作ったものを混ぜて使いました。専用の道具を使って竹を割くのですが、竹が「パカン！」と花咲くように割れるので子ども達は「もう1回～！」とはしゃいでいました。割り竹の香りを嗅いでみたり、剣に見立てて振り回してみたりと、遊び心満載なのも良いのですが、もう少し子ども達が作業に興味をもってくれるように心配りをしたいと思いました。出来上がった竹小舞はそれはそれは美しく、みんなで「このままでいいよねえ～」「でも冬、耐えられないね・・・」と見とれていたほどです。

### 2) 土こなし

隣町の解体現場から出た壁土を提供していただき、ゴミや石を取り除くためにふるいをかけ、ワラを混ぜながら素足で踏みこなします。まずは、ふるいにかけますが、土埃が舞い上がると「キヤー」と逃げ惑う子どもとお母さん達。こなすには小山を作って真ん中に穴を作り、水を入れ、踏むのですが、穴が小さくて、あっという間に定員オーバー状態。おしくらまんじゅうのような、こなし作業でした。そしてワラ切り。ワラを切る道具が人の手でも切れそうなほどの中華包丁よりも大きな刃で、力も要るし危なっかしい作業でしたがその恐ろしげな雰囲気に興味をそそられるのか、これも順番待ちが出るほどに、大人気でした。こなした土壁は3日以上は寝かせます。

### 3) 土壁塗り

土を踏んでから1週間後の予定でしたが、お盆や大きなイベントが重なり、約1ヶ月も土を寝かせてしまいました。泡が出るほどに土が発酵し、とてもとても良い状態になりました。まずはお手本ということで、大人数人で塗ってみました。土がとても重いので、「子どもにやあどうかなあ」と職人さん。子ども達も挑戦してみましたが、やはり土が重いせいか、グラグラのポコポコ壁になる始末。結局、職人さんに塗りなおされて、ぶすこく（佐渡弁で「すねる」の意）子ども達でした。職人さんは久しぶりの土壁だったらしくスルスルといっぱい塗ってくれました・・・

土壁は創造的な使い道があるので、「内装にも使おう」ということになりました。その時が子ども達の出番なのかもしれませんね。

### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

< 想定外 >

- ・考えていたよりも人の集まりにバラつきがあり、工程を一貫して伝えることが難しい。
- ・講師がプロの大工ではないので、施工についての悩みが多い。しかしそのおかげで、相談先としての人脈も広がったり、参加者間で智慧を出し合えるため、親交も深まり、一方的なワークショップではない空気が生まれるというメリットもあります。
- ・施工についての悩みに当たることが多いので、作業が順番通りに進まないです。たとえば、敷居を入れてみたら柱の幅が合わず、再度柱を動かすのに半日かかってしまった、敷居が完成したと思ったら穴が開いていた・・・等。
- ・子どもが手を出せない仕事もあるという事が解りました。興味が向く・向かないも関係していますが、時間をかければ手仕事



でできることが、作業の進み具合に依って電気を使わざるを得ない状況も発生してきています。

- ・ 工程上の相談などを持ちかけたことにより、隣町の建設会社さんの全面的な協力を得ることができました。当初の予定には入っていなかった敷地内の整備や、大木の伐採等、人力だけではできないことを進めてくれています。古材もたくさん提供していただいています。

<相違点>

- ・ 建具加工の講師を同じ村の大工さんをお願いしたのですが、古材を使っての作業に抵抗を感じた様子で来ていただけなくなり、急遽学生さん達に仕事を引き継いでいただきました。
- ・ 改修作業の進行状況と土壁作業を行うのに最適な季節との兼ね合いで「かまど作り」を来春に延期する事となりました。
- ・ 人が集まる週末がほぼ改修作業となってしまう、建築仕事と並行して行う予定だった農作業の時間が平日となり、ほぼ大人作業になってしまっています。
- ・ 作業に夢中になってしまうこともあり、写真を撮るのをわすれがちでした。記録係は記録係りとして、確保したいところです。

【今後の予定】

- 10月 土壁WS（竹小舞・こなし・塗り）
- 11月 建築WS（根太掛け・大引き）
- 12月 建築WS（内装・天張り・カウンター）  
土壁WS（内装装飾）  
森林整備（落ち葉でやきいも大会・石を並べて庭づくり・堆肥苗づくり等）
- 1月 建築WS（内装・カウンター作り）  
土壁WS（内装装飾）
- 2月 かまどづくりの準備
- 3月 かまどづくりWS 漆喰WS みそづくり



# 特定非営利活動法人循環の島研究室（新潟県佐渡市）

活動テーマ：「生きものとの協働」拠点整備による限界集落再生

## 佐渡の旧公民館を牛耕や薪能を通じた交流拠点へ改修中！

### 【活動地域の概要】

安養寺集落は佐渡島（佐渡市）のほぼ中央、島内最高峰金北山（1,172m）の麓と国中平野が接する辺りに位置する。戸数15軒、平均年齢70代後半のいわゆる限界集落である。山林と棚田の間をヤマメの棲む清流がながれる美しい里山、田園景観がひろがる。また羽黒神社能舞台は新潟県の文化財に指定され、毎年8月に催される薪能は、夏の風物詩として多くの人々に親しまれている。

### 【団体設立経緯】

当NPO法人循環の島研究室は2007年5月に設立した。直接のきっかけは、島内大佐渡山脈における牛の放牧を支える仕組みをつくろうと、有志数名で検討したことによる。社会的信用を得るためには、NPO法人を取得することが得策との判断である。また放牧支援のみならず、この島に多く内在する地域づくりや環境、観光等をめぐる可能性や課題に取り組むための体勢づくりとしての選択でもあった。島という条件を活かし、循環型社会づくりのモデルを広く提供したいという想いもある。



## 【活動の進捗状況】

本事業は佐渡島の限界集落の再生を長期的な目標とし、その一つである安養寺集落の空き施設整備を直接的な目的として実施中である。

### 1. 旧公民館の整備

この集落にはかつて公民館（兼御堂）として住民に使われ、その後新しい公民館が建てられたため不要となった建物がある。この空き施設を整備し、農山村らしい生活文化（＝生きものとの協働）の拠点として活用してゆく。着手時点の調査で、この建物は昭和初期には存在していたことが確認出来たが、建築時期は不明である。素朴な佇まいが農山村の景観にマッチし好ましい反面、現代における交流拠点、活動拠点としてはふさわしくない面もある。そこで今回の整備については、当初の計画に従って次の四点を現時点にて実施している。

#### a. コンポストトイレの設置

当該施設の従来のトイレは、「男女兼用小便用」であり、今日においては珍しい形態のものである。文化財的価値はさておき、不特定多数を含めた利用には甚だ不相当といえる。また付属する汲み取り槽は老朽化し使用の可否不明の状態となっている。そこで今日の利用形態に適し、なおかつ新たな処理槽施工を要さないトイレの形態として、コンポストトイレを選択した。コンポストトイレはその名の通り、し尿を資源とみなし肥料化するシステムを内蔵したトイレである。農山村文化の今日的再生に相応しく、また微生物によるし尿分解の働きは、本事業のテーマである「生きものとの協働」を体現するものでもある。

コンポストトイレの機種は大きさ、形状、実績、価格等勘案し、Sun-Mar社（カナダ）「エクセル」とした。4月に購入し6月に設置施工を終了した。

#### b. 囲炉裏の間の整備

当該施設は玄関を入ってすぐに板敷きの部屋があり、中央にかつて囲炉裏として利用されていた設備がある。ただしその囲炉裏は遺構化しその上にドラム缶改造簡易ストーブがおかれ、また全体が物置化している。

今日において囲炉裏は暖房装置というより、人の集いの場として再評価されつつある。赤々と燃えゆらぐ炎の効果により、現代的な会議室とはひと味違ったコミュニケーションの演出が期待される。そこで交流拠点に相応しい設備として、この囲炉裏使用の復活を計画している。具体的にはドラム缶改造簡易ストーブの撤去、天井部への防火用金属板の取り付け、排気用換気扇の設置、および出入り口部分の雨漏り箇所への補修を行った。7月に施工し完了した。

#### c. 新ストックヤードの整備

当初予定を変更し玄関両側、およびそれに連続する部分にて施工することとした。ストックヤードの庇を兼ねる玄関屋根部は老朽化し雨漏りが顕著なため、これを7月に補修した。

以上a. b. c. についてはいずれも、隣接する集落に在住し古民家再生施工に実績ある大工と協議の上遂行した。なお整備後の当該施設は、その立地する小字名から「野畑の家」と称することを予定しており、以下その呼称を用いることとする。



#### d. 電気配線工事

既存の電気配線は裸電球一個およびそれに付随する「二股ソケット」のみで、機能的に全く不十分のみならず安全面でも危惧される状態だった。そこで専門業者に依頼し、施設内の電気配線の全面的リニューアル施工を5月に実施した。

#### 2. 「牛耕復活計画」の作成

安養寺集落は昭和30年代まで水田耕作に牛が用いられていた。「生きものとの協働」の一環として、この牛耕復活の可能性を検討中であり、その実現にあたっては今回整備の「野畑の家」が企画、準備の拠点となることを想定している。そこで牛耕をあらたに導入する際の手順につき、ヒアリングや資料を基に計画作成に着手している。具体的内容としては、a. 牛舎の整備 b. 子牛の購入 c. 調教の開始 d. 牛耕の試行 e. 繁殖による調教の本格化 の各段階につき、その方法につき検討、まとめつつある。

#### 3. 薪能スタッフ体験による交流

当該集落の代表的地域資源として、羽黒神社能舞台（新潟県指定文化財）とそこで実施される薪能が挙げられる。薪の使用は里山林活用のシンボルともいえ、これもまた「生きものとの協働」の一環として位置づけられ得るものとする。ただし現状においては、毎年8月に行われる薪能は集落民の高齢化もあって、主にスタッフ不足の問題から今後の存続が危ぶまれている。

そこで当NPOでは薪能実行委員会に協力し都市部の若い世代によるスタッフ体験を企画し、結果、恵泉女学園大学（東京都多摩市）の学生、教員計5名に、薪能当日及びその前後の開催作業に参加していただいた。このメンバーの滞在や打ち合わせは現公民館を使用した。これは近い将来、現在整備中の「野畑の家」での実施を想定したものである。今回の経験を、薪能スタッフ体験のモニタリング及び都市との交流の試行の一環として位置づけ、活用開始後の「野畑の家」事業メニューを検討するための材料としてゆく。

#### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

主な施工時期が夏期にあたったが、今年の夏は記録的猛暑に見舞われ、施工者にはいささか負担をかけることとなった。その他の当初予定との相違点は、主に次の二点が挙げられる。

##### コンポストトイレ設置の場所

当初計画ではコンポストトイレは既存のトイレの位置に設置する予定だった。しかし装置現物購入後の現場合わせの結果、設置は可能であるものの空間的に狭く、使用者の動作がしづらいことが判明した。そこで施工者とも協議の結果、北側の物置スペースを改修し、トイレ室とすることにした。

##### 薪ストックヤード整備の位置

当初計画では薪ストックヤードは建物北面の壁沿いに整備する予定だった。しかしその後、地元住民とのやりとりの中で「薪のストックは日当たりの良い場所に設けるべき」との指摘があった。加えて意匠的アピール性も考慮し、建物南東向きである玄関両サイド、およびそれに連続する壁面（南西向き）に設けることとした。

なおストックヤードの雨除けともなる玄関屋根部分両端は老朽化が進み、雨漏りの甚だしいことが判明したため、そこが囲炉裏の間の入口であることも考慮し、当該屋根部分の補修を実施した。



【今後の予定】

活用開始準備

建物内部の施工はほぼ終了したので、活用開始に向け清掃および備品類等の搬入を行う。12月より徐々に活用を開始する。

薪ストックヤード整備の継続

ひきつぎ薪ストックヤード整備を続ける。具体的には台および枠部分の施工を行う。12月完了予定。以降薪づくりと搬入。

「牛耕復活計画」作成の継続

ひきつぎ「牛耕復活計画」作成を続ける。3月完成予定。

「野畑の家」お披露目の集い

関係各方面等を招き、整備完了した施設披露の集まりを催す。3月実施予定。

【その他参考となる事項等】

安養寺集落は2009年より三年間にわたり、「佐渡市集落支援モデル事業」の対象となり、マップづくりや郷土史調査、薪割り機の導入、中期滞在用施設整備、安養寺ブランドづくり等を展開、予定している。



# 八尾スローアートショー実行委員会(富山県富山市)

活動テーマ：地域とアートと学校と～拠点化と継続化を目指す

## アートショーを通して八尾の旧木造校舎の活用を模索中！

### 【活動地域の概要】

美しい街並みを背景に、しんしんとした踊りと唄、三味線、胡弓が一体となって艶やかな雰囲気醸し出す「おわら風の盆」で有名な富山市八尾町。「越中八尾スロータウン特区」に認定されているこの八尾町地区もその多くは豊かな自然に恵まれた中山間地域で覆われていて、他の地方自治体同様に過疎化・高齢化の問題を抱えている。この地区には2004年当時、現役校と廃校あわせて7校の木造校舎（八尾町地区のみ）が存在していたが、2005年の市町村合併で富山市に吸収合併されるやいなや、現役の檜尾小学校を除く6校舎が解体された。檜尾小学校のある黒瀬谷地域は、昨今の小中学校の統廃合を避け独自の教育を行なっている。2009年、新校舎への移転に伴い旧木造校舎は使われていない。



### 【団体設立経緯】

自然豊かな中山間地域でありながら、JR越中八尾駅から僅か3kmに位置する檜尾小学校のある黒瀬谷地域は、昨今の小中学校の統廃合を避け学校を存続している。2009年、新校舎への移転に伴い旧木造校舎は使われなくなった。しかし廃校区ではないので地域から学校はなくなるしないし次世代が育つ。学校という機能が存続され、貴重な地域資源である旧木造校舎も併存するという全国的にも「稀有で幸運」な状況を活かした地域づくりを目指す。



## 【活動の進捗状況】

### 全体の主旨

八尾スローアートショーは、八尾町の中山間地域の木造校舎で2004年から継続してきました。「一学年十名程度の規模の学校という環境や中山間地という立地条件により、子どもたちは外部から受ける刺激が多くありません。そうしたなか「八尾スローアートショー」に伴う、様々なジャンルのアーティストとの触れ合いが、子どもたちにとっての貴重な刺激となっている」ことが学校側にも認められました。それに伴い、PTAや地域住民の賛同も多くなってきました。一方、2009年1月から新校舎移転によりこの木造校舎は使用されていません。

小学校の統廃合が数多くみられる昨今、このように中山間地域において、現役の学校があり、かつ旧木造校舎も併存しているのは、全国的にも「稀有で幸運」な地域といえます。「廃校」とはその地域から「学校という機能」が失われることですが、この小学校は新しい校舎へ「移転」したので、学校は存続し、次世代の地域の担い手が育まれることを意味します。富山市はこの木造校舎の利活用方針は未定としながらも、地域住民の意志がなければ解体の方針だといえます。地域の方々と有効な利活用策をまとめることは、この地域にとって貴重なタイミングだと思われる。今やらなければ、他の多くの木造校舎と同様に、十分な議論もないうまま、貴重な地域資源である木造校舎が姿を消してしまいます。

そうした「地域とアートと学校と」の関係性を一緒に考えていく場を、ゆっくりと「八尾スローアートショー」が紡いでいくことで、新たな状況が生まれることを期待しています。

### 全体プログラム

#### (A) アートプログラム

\* YSAS2010 = 八尾スローアートショー 2010

YSAS2010 WS : 児童と芸術家とのワークショップ (1)

YSAS2010 Art Show : 校舎などを使用した芸術展

YSAS2010 Veg. : 地元野菜とYSASのコラボ (2)

#### (B) 調査・研究・提案

YSAS2010 ReSchool : 木造校舎利活用事例調査・研究・提案

#### (C) 意見交換会

YSAS2010 Think: 木造校舎利活用に向けた意見交換会「Think 樫尾！」(3)

これらのプログラムが相互補完的に働き、「八尾スローアートショー」の総体が作られるものと考えている。

### 助成対象プログラム

上記、全体プログラムの内、 、 の一部に対して貴財団の助成をいただいているので、それらを中心に中間報告を行ないます。

#### (1) YSAS2010 WS : 児童と芸術家とのワークショップ

5人の芸術家を講師に迎え、全学年を対象(2、3年生は合同で実施)としたワークショップを実施した(2つのWS実施が助成対象)。

・ 9月30日実施ワークショップ(13:15 ~ 15:30)

梅野歩美 +4年生(12名)「やさいスタンプ~届け、八尾のやさい~」

山口尚之 +6年生(12名)「建築家になってみよう！」



- ・ 10月7日実施ワークショップ(13:15～15:30)  
米田昌功+1年生(12名)「メイキング・クロッセ・ターニャ・タウン～写真で黒瀬谷のジオラマ作り～」  
佐竹宏樹+2,3年生(8+11名)「お八ながらート・プロジェクト」  
塩川岳+5年生(10名)「ビニール動物園」

<活動内容>

- 6月:学校側へ打診。昨年までの形式1～2学年/芸術家、非公開、授業に組込む)を踏襲することで同意。時期は、2学期、9月下旬から行なう。
- 6月～8月:講師選定、打診などの調整作業。
- 8月～9月:WS内容・日時について、学校、講師と詳細を詰め実施内容の確定を行なう。
- 9月30日、10月7日に実施。



<補足>

数年に渡るワークショップ実績があるため、問題なく終えた。またWSは授業に組み込まれ、非公開で行うこととしているが、PTAからの要望もあり今年は児童との作品を後の展覧会(YSAS2010 Art Show)にて展示することで公開した。

(2)YSAS2010 Veg.:地元野菜とYSASのコラボ

地元野菜販売母体である黒瀬谷交流センター運営委員会は、地元スーパーでの販売コーナーのほか「菜菜こられ市」を月1回開催している。この運営委員会との協同プロジェクト。

当初の計画は、児童とのWSを通じて地元野菜販売のパッケージに活かすというシナリオを描いていたが、黒瀬谷交流センター運営委員会や芸術家、デザイナーなどとの打合せを重ね、安易なパッケージ開発よりも真の交流を図るなかから中長期的な視点で可能性を探ることとした。また児童とのWSは本来「体験」を重視しており予定調和的な成果物の制作を目的をしていない点からも好ましい変更と考えた。

<活動内容>

- 5月～8月:各関係者と打合せ。プロジェクト内容検討し、「パッケージ化」から長期的な視点に立った「交流」を重視することに決定。
- 8月:黒瀬谷交流センター運営委員会などと顔合わせ、販売状況視察
- 9月:「菜菜こられ市」への体験参加交流。黒瀬谷交流センター運営委員会メンバーと八尾スローアートショーの展示会場(YSAS2010 Art Show)でのカフェメニューの試作試食会実施。地元野菜を使った児童とのWS「やさいスタンプ～届け、八尾のやさい～」実施(直接的な販売などにつながるWSを避け、ゆるやかな地元野菜とのつながりを求めた)。
- 10月:YSAS2010 Art Showでカフェ実施。



(3)YSAS2010 Think:木造校舎利活用に向けた意見交換会「Think 櫻尾！」

これまで、2回実施した。また、プレ意見交換会として、地元の祭り(ごんだ祭り)時に出向き各関係者と交流した。第1回目は、八尾スローアートショーの概要説明とともに木造校舎の利活用事例を紹介し意見交換を行なった。自治振興会、PTA、学校の



役員が代わり、昨年度末よりも慎重な意見が目立った。第2回目は、児童とのWSの学校側の評価や、自治振興会、PTA、住民、作家などから、スローアートショーの意義や木造校舎利活用への意見を求めた。木造校舎を残していくべきであるという当委員会の主張をするとともに、隣接する地域で活動するNPOの方々にも出席を願った。このNPOは地元木造校舎の利用が行政より認められているが、我々が対象としている榎尾小学校旧木造校舎の扱いは明らかに違うことがわかった。地元住民は榎尾小学校旧木造校舎が「耐震性」の問題から「使用できない、残せない」との認識をしていたが、同様のケースで、しかも隣接地域での事例紹介により、新たな展開を期待する方々も見受けられた（意見交換会後の懇親会の席で。また後日そのような意見を複数伺った）。



#### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

自治振興会会長やPTA役員が変わったことにより、前年度の盛り上がりにくらべ、保守的になった感が否めない。但し、第2回意見交換会での隣接地域での活用事例の紹介により再び士気が高まる兆しが見えてきた。

我々の活動のうち、作品の展覧会（YSAS2010 Art Show）の会場として旧木造校舎内の貸出しを求めていたが、最終的に校庭のみの使用許可に留まった。



#### 【今後の予定】

- ・児童とのワークショップ：さらなる検証を行なう。
- ・地元野菜とYSASのコラボ：意見交換会などを通じ検証を行なうとともに、来年度への展開を模索する。
- ・木造校舎利活用に向けた意見交換会：今後、大小の数回の意見交換会を実施予定。上述のNPOによる隣接地域での木造校舎利活用事例を精査し、当地域での利活用策に活かしたい。現在、対象とする榎尾小学校旧木造校舎の半径5kmほどのなかに、市の見解のことなる木造校舎が3校存在する。
  - a. 榎尾小学校旧木造校舎
    - ：耐震診断を行ない、危険建築物と判断され、一切の校舎内利用が認められていない
  - b. 旧大沢野町小羽小学校
    - ：上記のNPOこばが使用許可を得て活動中。耐震診断は行なわれていないが榎尾小学校旧木造校舎と同様と思われる。
  - c. 旧桐谷小学校
    - ：H17年の市町村合併以前の旧八尾町の時に住民の承諾を得て芸術家がアトリエとして借り受ける。今年度に入り、市が芸術家に売却（30万円程度、土地共）の方向で調整中。
    - これらの状況を正確に把握し、当地域での利活用策に活かしていく。



#### 【その他参考となる事項等】

YSAS2010 Art Show プログラム（10/9-11）において行なった作品および木造校舎ツアー（9日は雨天のため中止）は、参加者からは好評で新たな試みとして位置づけたい。木造校舎内は立入ることができなかったが、木造校舎の裏側の佇まいをめぐるとは新鮮であるらしく、また当学校卒業生からは様々なエピソードも聞くことができた。

# 特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋 (大阪府大阪市)

活動テーマ：生活保護受給者の地域貢献活動参加および生きがい作りプログラム

## 釜ヶ崎で生活する様々な人のまちへの関与を強化中！

### 【活動地域の概要】

釜ヶ崎地域は生活保護受給者が住民の約4分の1以上を占めています。釜ヶ崎に住むほとんどの人々は地元の人々ではなく、失業など何らかの事情があり他の地方から流れ住んでいる独居男性が多数であり、地域や人々との結びつきは希薄です。

生活保護受給者は地域からの孤立や生活に生きがいを見いだせないことから、精神的に不安定となり、不規則な生活リズムやアルコールへの依存などが問題となっています。

釜ヶ崎という地域は確かに日本の中では特別な地域であり「貧困」という切り口でクローズアップされてしまいがちですが、問題は貧困だけでなく貧困や差別をベースにおこる孤立やコミュニティーの分断であるとわれわれは考えています。



### 【団体設立経緯】

アートNPOとして、「表現」を通じて社会に関わり、いきいきとした市民生活に寄与するために活動に取り組んできました。地域内でインフォショップカフェコルームを運営し、現在までにアートによる包摂的就労支援事業の実施や、障がいを持つ人、社会人、高齢者、子どもなど、さまざまな人々を対象にアートワークショップなどを行い経験を積み重ねています。2008年1月より、拠点を現在の大阪市西成区に移し、山王ミニ夜回りや夏まつりへの参加など地域に根差した活動を継続。2009年6月より同地区にカマン！メディアセンターを立ち上げ、他の地域からまちへ訪れる人の窓口として、またアートを切り口とした地域交流・情報発信の拠点として運営中。



## 【活動の進捗状況】

4月下旬から5月では、当活動の骨子や軸を固めるべく、協働する地域のサポーターハウスのスタッフや利用者の方々（おもに生活保護を受給している高齢者の方）、ワークショップを行う「こどもの里」「山王子どもセンター」のスタッフや子どもたち、ボランティアとしてかかわっていただく居宅の生活保護受給者の方たちにヒヤリングを行いました。

ボランティアをしていただく生活保護受給者の方（中には年金受給者の方もいました）の言葉で「一人で部屋でじっとしていたらおかしくなる。人としゃべりたい。人によるこんでもらいたい。」という声が、印象的でした。

ワークショップのファシリテータや勉強会の講師等は、若手（30代前半）で釜ヶ崎に実際に関わっていて、地域の人々の顔を見知っている音楽や地理学の研究者を中心に依頼しました。彼らが釜ヶ崎というコミュニティのひとりであること、今後もコミュニティに関わり続けてくれること、またその関わりの中で、ささやかかもしれませんが今回のワークショップや勉強会を行うことが、彼ら自身や地域にとって糧やきっかけになると確信し、依頼しました。

### 1. 子どもたちの施設でのワークショップ

今回の活動の大きな流れとして、前半は「自分たちが積極的に地域の活動にかかわる。地域の人々にかかわる。」後半は「自分のかかわったこの地域やひとびとを再確認し検証する。」という流れにすることにしました。

6月11日こどもの里にて第一回目のワークショップ（講師：小沼亮子、赤井浩。ボランティア3名、子どもたち14名）を行いました。8月のお盆に毎年おこなわれる「釜ヶ崎夏まつり」の宣伝として毎年行う「ちんどんパレード」のための音楽ワークショップです。自分の背丈ほどもある太鼓や見たこともない楽器に「これ、さわってもいいの？」と最初は子どもたちはおっかなびっくりでしたが、だんだん体のなかに音楽がしみわたるにつれて「これも叩きたい！」「でかい声だしてみてもいい？」と自由に表現を楽しむはじめました。

同様に7月28日山王子どもセンターにてワークショップを行いました（講師：小沼亮子、赤井浩。ボランティア4名、子どもたち12名）。こどもの里と山王子どもセンターは、地域の環境は多少ちがうものの立地がほど近いこともあり、クリスマス会や子どものお祭りなどのイベントの際に行き来があり、今回のちんどんパレードも子どもたち同士が出会う機会のひとつとなっています。

8月12日に行われたちんどんパレード（ファシリテータ：小沼亮子 参加者約70名、セキュリティスタッフ6名）では、様々な仮装やフェイスペイントをほどこした子どもたちが、約2時間のあいだ「聖者の行進」を演奏しながら町を練り歩き、音楽をかき分けるようにして町の人たちに「お祭りに来て下さい」とはにかみながら500部以上のちらしを手渡しし、宣伝していました。手渡された人々もほほえみながら「えらいなあ」「がんばりや」「まつり楽しみやな」と子どもたちにエールを送っていました。

ちんどんパレードには、釜ヶ崎在住の人や釜ヶ崎にほとんどなじみのない若い学生やミュージシャンなど、内外のさまざまな人々が参加したのですが、「貧困」や「暴動」などというネガティブなことばで語られがちな釜ヶ崎にも、このようににぎやかで



撮影：若原瑞昌



撮影：若原瑞昌



撮影：若原瑞昌

楽しくパワフルな側面があるということを感じることができ、釜ヶ崎の人々のマンパワーやあたたかさをアピールできたと感じています。

9月以降は「自分のかかわったこの地域やひとびとを再確認し検証する」をベースに、この地域での研究をつづけている地理学者の原口剛氏にワークショップを依頼しました。

ちんどんパレードや夏まつりで子どもたちが実際にコミュニティーに働きかけたことをきっかけに、地域の歴史や町に住む高齢者がたどってきたであろう歴史、そして自分たちが次の歴史を造ってゆく当事者であることを、よく見知った風景の、現在・50年前・100年前の写真をプロジェクターで見比べながら思いを馳せました。

このワークショップは非常に歓迎され、子どもたちや児童施設のスタッフからこのようなワークショップに対する「アンコール」が出ることは初めてでした。今後どのように継続するかを検討しています。

## 2. アウトリーチカフェ

高齢の生活保護受給者が多く住むサポーターハウス「おはな」の一階のフリースペースを借りて行ったアウトリーチカフェでは、当法人のカフェ部門「コルルームカフェ」がそのまま「おはな」に月一回まるごと移動したというイメージで行いました。ワークショップを手伝ってくださった生活保護受給者の方たちや、地域の労働者の方々がボランティアでカフェを運営しました。

コルルームカフェの常連さんや「こどもの里」「山王子どもセンター」の子どもたち、地域のさまざまな団体の方、このかいわいのさまざまな人たちが「おはな」にお茶を飲み遊びに来ては、おしゃべりに花をさかせていました。

釜ヶ崎には様々な支援団体があるのですが、全く知らない相手にはプライベートなことを相談しにくいというケースがよくみられます。このアウトリーチカフェで顔をあわせたりつながりができることによって、相談しやすい環境ができたと思います。

また、生活保護受給者のボランティアの方が「今日は暑いなあ、とか、どうでもええこと話せる相手があるんがええんやなあ。」とおっしゃっていました。たしかに、ここで生まれる会話はどうでも良い会話なのですが、そのような普段の会話や挨拶がベースにあることで、本当に大切なことやどうしても伝えたいことの会話の糸口となり、お互いがつながり合い相談しあえる環境になり得るのだと思います。

9月21日には前日が敬老の日であったこともあり、すぐ近所に事務所をかまえ、最高齢90歳のメンバーも参加する「紙芝居劇むすび」の紙芝居の公演、釜ヶ崎地域で活躍するボランティアの理容師による無料散髪も行い、おはなに住む方々や来場された方々に喜んでいただけました。

## 3. 夜回りについて

釜ヶ崎地域は野宿者が国内でも極端に多い地域です。多くの生活保護受給者は野宿経験があり、その経験のつらさや心身ともうけるダメージは保護を受けることができても、長い間癒し得ない傷となります。

釜ヶ崎地域の多くの団体は「夜回り」としておにぎりやパン等



を手に、野宿者の安否を確認したり相談事をたずねたりしています。こどもの里、山王こどもセンターのこどもたちも真冬におにぎりをにぎって夜回りを長い間続けています。

当団体も「ご近所さんにおにぎりをお渡しする」という考えで、有志から寄付されたお米や梅干し等の食材を使って山王地区を中心に月一回、約25食～40食位をお渡ししています。多くの野宿者の方が、たったひとつのおにぎりを渡されたときに「どうもありがとう」「雨やのにすみません」とねぎらいの言葉をかけてくれ、自分がこのような状況に陥ったときに人をねぎらうことができるかと考えさせられます。

#### 【想定外の事柄、当初予想との相違点】

当初予定では本事業の最終の勉強会やワークショップなどを2月としていましたが、タイトにした方が地域に良い影響が与えられると判断し、ワークショップや勉強会などを11月末までとしました。

また、生活保護受給者のみならず(今回対象となったボランティア参加者、アウトリーチカフェ利用など)、生活保護受給にさまざまな困難な理由からあがれない人、あがらないひと(さまざまな理由から生活保護が受給できない野宿者、福祉の世話になりにくいと拒み続ける野宿者など)、日雇い労働者など、多くの人々がさまざまなバックボーンをかかえています。この地域では、生活が困難な中でも支え合って生活している人々が入り混じって暮らしているため、「生活保護受給者がボランティアする」という考えより「地域のさまざまなバックボーンをもった人々がつながりあい助け合う」というように考え方を改めました。

#### 【今後の予定】

10月8日に山王こどもセンターにて原口剛のワークショップ(最終)10月23日、11月6日、11月下旬(全三回)、地域の簡易宿泊所(ドヤ)の研究を続けている平川隆啓氏による「釜ヶ崎、という名前や既製の知識のみでこの町を認識せず、実際に地域のいろいろなひととふれあいながら町を体感する」ということをテーマにまち歩きと勉強会を行います。



# 宇陀松山華小路実行委員会（奈良県宇陀市）

活動テーマ：まちへの気づきと参加のシステムづくり

## 宇陀松山をダリアの花で彩り、まちへの関心を惹起中！

### 【活動地域の概要】

宇陀市は奈良県東部の山間地に位置し、冷涼な気候と農林業が盛んな土地柄。かつて、宇陀の中心部として栄えた松山は、2006年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された歴史的な町並み。城下町から商家町へと発展したこの町では、おもに江戸後期～昭和戦前にかけての町家が連なり、城跡と宇陀川の間に細長く展開している。

20年程前から歴史的町並みを生かしたまちづくりが始まり、ライトアップ等が行われてきた。2006年より市町村合併で宇陀市が誕生し、4町村がひとつの市になったが、なかなか旧町村の枠組みを忘れることができないのも事実であった。2009年から始まった「宇陀松山華小路」は、もとはお隣町だった榛原と大宇陀を結び付けたイベントであり、「町並み」だけでは接点のない花の好きな方を町並み・まちづくりへと引き込むねらいをもった活動なのである。

### 【団体設立経緯】

2008年12月、奈良県の緑化フェア推進室よりサテライト会場の打診があった。その時に奈良県がダリアの球根生産量日本一で、その半分近くを宇陀市榛原の生産者が賄っているという話を聞いた。宇陀市で日本一を支える産業があることが驚きで、もっと市民に知らせなければと思い、インフィオラータ神戸（まちをキャンパスとして花びらで絵を描くイベント）の経験をもとにこのイベントを提案した。

そこで、サテライト会場の案件は市が手を挙げなくても地元で盛り上げるつもりで実行委員会を組織した。メンバーの選定については、意識して若年層に声をかけ、当時、指定管理者としてまちなみギャラリーを運営していた「地域づくり支援機構」も巻き込んで結成した。「地域づくり支援機構」は殆どが地区外の人で構成される団体で、近所では遠巻きに彼らの活動を見ており、ギャラリーの使用頻度がなかなか伸びずに困っていた。このイベントは地域の方との協働作業により、地域づくり支援機構の方と近隣住民との距離を近づけることも狙いとして考えていた。



## 【活動の進捗状況】

### 1. 宇陀松山を花で飾る取り組み

中高生・一般からの図案募集

5月 「広報うだ」5月号にて募集告知

6月 最初の締切日、応募総数7通。選考できるほどの数ではなく、再募集を行う。小中学校に告知するため教育委員会に相談をしたところ、教育長より地元大宇陀小学校の美術担当教員をご紹介いただいた。大宇陀高校には美術部および美術の授業が存在せず、別ルートでの募集に切り替えた。

7月 地元自治会長にイベント・ボランティア・デザイン募集告知を配布し、町内会での回覧を依頼。市内の学校には返信用封筒を添えて再度郵送。8月の登校日後に締め切りを延期する。知人友人筋にもデザイン応募依頼。

8月 苦勞の甲斐あり、39通の応募が来た。花卉組合、地元自治会、地元NPO、教育委員会（美術担当の先生）、実行委員会の代表がそれぞれ絵を審査、合計10点の作品を展開することに決まった。

9月 道路管理者（市）警察と協議し車両通行止めの許可申請を提出。

10月 「広報うだ」にて、作品応募の御礼、イベント告知、ボランティア募集の記事を掲載。ミニコミ「宇陀のはな」でも同様の記事を掲載。ボランティア希望者の受付開始、当日の段取りを花卉組合と相談。商品の発注。宇陀松山華小路実行委員会オリジナル図書カード2000円を作成。昨年写真を使ったものを10点作った。警察より、道路使用の承認が下りる。交流会会場、町並みギャラリー石景庵と料理内容の打合せ。16日土～17日日まで、宇陀松山華小路を実施。

### 2. 地域の魅力に触れる取り組み

7月 「ダリアを知ろう 入門編」と題し、県緑化フェア推進室より講師を招聘。原産地、渡来経路、種類、育て方等のレクチャーを受ける。

9月 「薬草プランターづくり」開催。大宇陀ボランティア協会の協力を得て、薬草の苗をプランターに植え、修景用木箱を制作。歴史的町並みの中で希望する家庭の軒先に設置した。

10月 ダリアの花で歴史的町並みを彩るイベント、「宇陀松山華小路2010」を実施。事前申し込みのあったボランティアと共に生産農家の圃場まで花を摘みに行き、公募したデザイン画を見ながら花を並べ、絵を完成させた。2日間の展示とし、イベント終了後にダリアの花を希望者に譲渡。もらった花たちは各家庭でそれぞれ第3の人生を歩む。



### 3. 地域づくりの担い手を育てる取り組み

8月 デザイン画の応募者は、宇陀市に関連する物事をあれこれイメージし、絵にしていってとみられる。

10月 ボランティア希望者より連絡が複数入る。地元8名、市外から3名、県外から1名。花摘み作業で打ち解け、お互い話が弾むようになる。20代男性～60代女性まで、4:8の男女比。花並べには女性が圧倒的に多かった。近所の男性に話を聞くと、女性たちの怪気炎に押されて中に入ることをためらった、とのこと。

#### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

最初のデザイン応募締切で、想像よりも応募数が少なかったこと。再度募集をかけると同時に、地元小中学校には返信用の封筒を同封して発送した。あとで話を聞くと、初めてのことで、どんなものをイメージしたらよいかわからなかったとのこと。同じお題で来年も募集があれば、出したい図柄がある、と複数の方から言われた。

また、今年の夏は猛暑となり、ダリアの生育が悪かったため花の供給で不安があったが、生産者の努力により花を賄うことができた。中には、当イベントのために大輪のダリアを確保して下さった農家もあり、感激した。

当初は、イベントの数を少なめに設定していたが、実行委員会や周囲の提案によりイベントそのものにふくらみが見えた。薬草茶の振る舞いは、地区内にある薬草園で活用されずにいる近代和風の茶室、「知止荘」の活用モデル提案として急遽行うことになった。

行政との連携については、今回はあまり考えていなかったが、県（宇陀土木事務所）が積極的な支援を買って出で下さり、駐車場の確保や車に対する表示看板の設置、記者クラブへの投げ込み等、実行委員会では気づかない点のフォローや広域に向けての発信を担って下さった。いいバランスで協働できたように思う。

#### 【今後の予定】

華小路にご協力いただいた方への御礼まわり、薬草茶の振る舞い、ダリア染め教室の開催、年間通じての活動の取りまとめと来年に向けての課題整理。

#### 【その他参考となる事項】

歴史的な町並みの路地に、花を敷き詰めたら面白いだろうな。生産者も元気づけたい、外部から応援してくれているNPOと地元とがお近づきになってほしい。こうした想いが絡まって始めたイベントが今年で2回目となった。ボランティア募集は県境を越え、三重県の人をも巻き込んだものとなった。市境も軽く飛び越え、奈良県内の都市部から熱心なダリアファンが集まってくれた。

花を摘む、花を並べる、という作業、途中から二手に分かれてそれぞれ7時間かけて実施した。冷静に考えればものすごい重労働なのに、花を摘む作業も並べる作業も楽しくできた。脳内物質を出す作用が花にはあるのだろうか。みんなでひとつのおおきなものを作り上げたという達成感が、物理的・心理的距離感を埋めた瞬間に立ち会えたことが嬉しい。

出来上がったものを見せるのではなく、来訪者を巻き込みながら完成に近づけていく過程が大変面白いイベントだと思った。





# 特定非営利活動法人まちづかい塾（岡山県瀬戸内市）

活動テーマ：「汐まち・人まち・牛まろび」でよっくら処！

## 牛窓の空き家を活用した地域の茶の間を計画中！

### 【活動地域の概要】

本会の開催する第3回まちづかいリーダー養成塾へ、高齢者引きこもり予防対策を目的として、牛窓町の「しおまち唐琴通り地区（旧町名：関町・西町・本町・東町）」から5名参加。修塾後、関町の二人が核となる「屋外型ふれあいサロン・関町オープンカフェ」開催を機に、まちづかい塾コミュカフェ支援事業として参画。

住民主体の「関町オープンカフェ」を、しおまち唐琴通り地区関町の公園で毎月一回、定期開催。参加者が毎回100人を超す活動になった。冬を迎え、天気や気候に影響されない地域拠点の希望が高まり、住民が運営主体となるサロン、常設型「地域の茶の間」の開設を必要とされた。



### 【団体設立経緯】

- |         |   |
|---------|---|
| 2000年から | 公共空間有効活用による賑わいづくりを研究。   |
| 2005年から | 公園における賑わいづくりの社会実験として、オープンカフェを定期開催。<br>他、道路や商店街を活用した事例としてオープンカフェやライブ、アートパザールを開催。<br>普及活動としてフォーラムやセミナー、出前カフェによる、地域団体の活動支援を開始。 |
| 2007年から | 人材育成セミナー「まちづかいリーダー塾」を毎年開催。<br>都市環境的町カフェに福祉活動的コミュニティカフェの要素を組み入れ、「カフェ」をツールとした「人と街」の元気づくりをミッションに掲げた。                           |
| 2009年8月 | 特定非営利活動法人の認証を取得。現在に至る。  |



## 【活動の進捗状況】

### 1. 空き家候補を探すための現地調査

- ・ 関町オープンカフェ実行委員会を通じて地域住民の意識調査、勉強会を開催。
- ・ 関町オープンカフェ実行委員会と協働で、しおまち唐琴通りの空き家の持ち主に賃貸しを打診。
- ・ 協議中に対象地区4町の関町と西町・本町・東町の意識や活力の違いが浮上。
- ・ 牛窓町としてのビジョンを、瀬戸内市社会福祉協議会牛窓支所と瀬戸内市まちづくり推進課とまちづかい塾で協議。本事業を牛窓町の高齢化対策に連携する事業とすることに決定。
- ・ 元気な関町から高齢化・過疎の加速が早い西町・本町・東町に重点を置くことに変更。



### 2. 空き家候補再検討

- ・ 3町の有志による準備委員会で、使いたい、活用したい地域の空き家をピックアップ。
- ・ 9軒が浮上。みんなで歩いて、条件を検討した結果下記の3軒に絞った。

#### 最終候補地

本町と東町の間にあたる旧フェリー乗り場の切符販売所跡（しおまち唐琴通り東端）  
昭和初期の建物 保存状態良好

本町の路地裏にある空き家 地域拠点の中心の世話人（keyマン）の家の近く

昭和中頃の普通の住宅 一部雨漏り 他はまあまあ

路線バス（JRがないため路線バスが唯一の公共交通手段）の終点にある旧車掌仮眠舎

大正時代の長屋の一角 半分廃屋状態



#### 賃貸交渉経過

：海が見え、駐車場もあり、高齢化率の高い地区の中心で、立地も建物も最も適格。

平日でも釣り人や日向ぼっこに出てくる住民が溜まる場所に面した空き家。

持ち主が施設に居り、管理している縁故者では賃貸の判断が出来ないかと断られた。

：持ち主は了承。すぐに取り掛かれるが、位置的に本町路地の奥のため、利用者が本町の人だけに限られるのではないかと懸念。近所の井戸端会議的集まりやすい場所。

中心の世話人川崎さんの家の近くなので、高齢で足の悪い川崎さんが採配しやすい。地域住民に聞くと、かわいい妖怪話などの有る、地域に密着した庶民的な場所。最有力物件。

：西町に近い関町に位置する。地区唯一の足であるバス終着点であり、地域四町の住民生活のコアの場所。近くに食料品店や飲食店がある。持ち主は前向きに検討中。

### 3. 運営スタッフの育成

今まで関町住民が主導していたが、本町住民へ主導が移管され



たため、自分たちで運営できるか否かの、不安が持ち上がった。「川崎さんのおばちゃん（地域の中心的世話人）が、旗を振ってくれらば」との声の元に、男女6人が集まり、運営委員会結成。

#### 4. 住民独自による拠点運営の実施練習

候補の空き家を交渉する一方、地域住民の拠点を運営に対する不安を取り除くため、練習として屋外型サロン（オープンカフェ）を企画。本会の機材を貸し、地域世話人の方々と一緒に本町の空き地通称「象さん公園」で2回、実施。地域参加者の好感触を得た。

#### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

##### 計画の見直し

今回の事業は、本会の2009年度まちづくりリーダー塾修了生の主催する関町オープンカフェ実行委員会から、「オープンカフェの弱点である季節や天候に左右されないで住民が集まれる地域拠点がほしい。」との声から始まった。しかし、現地に入って町を歩き、住民の声や地理的条件を整理するに従い、対象地区4町の温度差、理解の違いが浮かび上がり、利用対象者のニーズの整理から再検討することにした。

6月中に関町炭田邸を改装して地域拠点とする計画で、構想図面も出来あがっていたが、「牛窓町の中心地に近く、さらに地区の西端に位置する関町だけが、にぎやかになる」と、他の三町から不満の声が出た。

関町はしおまち唐琴地区の西の入り口で、観光客も多く路線バスの終着点もあり、まだ幾分人の往来がある。そこから東へ続く三町（西町・本町・東町）は、商店会も九割が店を閉め、空き家が目立つ地区。

漁師の西町・東町、船大工の東町は地場産業も斜陽となり、実質高齢化率47%。フェリー乗場も関町へ移築され、観光客も関町止まりで、ますます過疎に拍車がかかっている。

瀬戸内市社会福祉協議会牛窓支部を通じた地域の希望もあり、住民が積極的な関町は「しおまち唐琴通り保存と活性化プロジェクト」に任せ、本事業は高齢者の多い西町・本町・東町に重心を置き、拠点として三町の中心になる本町付近の空き家を検討することになった。

#### 【今後の予定】

10月20日	対象物件決定会議
10月28日	賃貸契約
11月20日	工事着工
1月15日	完成予定
3月3日	オープン予定

#### 【その他参考となる事項】

##### 地区状況の変化について

「関町オープンカフェ」の賑わいや参加状況を見て、江戸時代に朝鮮通信使の寄港地としてにぎわった「しおまち唐琴通り」の街並み保全を考えていた有志が、「しおまち唐琴通り保存と活性化プロジェクト」の協同設立を「関町オープンカフェ」へ提案し、合流する運びとなった。



結果、地域活動の運営参加者の過半数を閑町住民が占めることとなり、4町のバランスが崩れた。

まちづかい塾としては、しおまち唐琴通り全体のにぎわいを考えるために、瀬戸内市社会協議会牛窓支所と協力して、バランス良い地域拠点の配所へ努力することにした。

\* どの地区も自動車の入れない路地や坂道の多い地形で高齢化率が45%前後である。結果、外出しにくい地域といえる。従って、誰もが歩いていける範囲つまり、町内毎に拠点が必要という結果になった。

#### 今回の事業参画による波及効果

閑町から2軒、空き家の賃貸の申し出があった。炭田邸と高祖米店である。炭田邸は「しおまち唐琴通り保存と活性化プロジェクト」が、観光客と住民の交流とB級グルメ館として「地域プラザ」を開設するために活用、高祖米店は障害者施設の作品展示販売場所に活用されることになった。

「空き家になっても、賃貸にはしない」と、頑なに閉鎖的だった住民が、本会主催の活用事例の提示や、鞆の浦見学会などを通して、空き家活用に前向きになってきたことは、私たちが活動支援に入った効果だと思う。

#### 住民の意識について

古い町並みと共に過ごしてきた古い住民は、穏やかに手を取り合っているようで、実際には裏腹な状況も事あるごとに露見し、注意に注意を重ねなければ意向を掌握しづらい。打合わせなど短時間の接触では、小さなNOのキャッチは難しい、アンテナをよく磨き、日常的な会話も多く持つように努め、隠れている小さなNOをキャッチしなければならないことを学習した。

同じ溜まり場なら、海が見えるとかきれいな街並みの中を選びたいのは余所者の考えで、地元にとって、景観より利便性優先であった。

この地域には、木造の江戸末期からの家が空き家となり多く残っている。そんな建物を修復して、地域拠点にしたいとイメージしていた。しかし、住民と話すたびにそれは余所者の考えだと思った。

今回の事業は 高齢者の見守りや引きこもり予防のための地域拠点作り。街並み保存が目的ならば街並み景観を良好にする要素の建物を選べるが、福祉的目的が強い場合、住民が集まりやすい愛着が持てる場所を選ぶべきだと考えた。

住民が言うには、しおまち唐琴通りは、商家、しかもそこそこの豪商が並ぶ区域で、庶民には一線を引く場所になるから、余計に庶民ゆかりの路地裏を希望するそうだ。候補となっている裏路地の家は、傷みも激しく、建物としての魅力は少ないが、地域住民がなじみやすく気持ち安らぐ場所ならば、ここを拠点として改装しようと考えた。

この辺りは漁師町で、せまい部屋に何人もの家族が、寄り添って生活していたという。美味しい魚料理も時々供される、笑い声の途切れない地域拠点が期待できる。



# おいもを愛する会（広島県呉市）

活動テーマ：おいもラブ・ステーション・プロジェクト

## おいもを核として呉の住民をネットワーク中！

### 【活動地域の概要】

広島県呉市広地区は、近年市人口が減少する中、子育て世代、さらに外国籍住民が他地区よりも多く、地区人口が増加しており、地区内の小学校児童数も増加しています（平成17年末から平成21年末までに、市全体では25.4万人→24.5万人、広地区では45.4千人→46.1千人）。一方、既存住民の高齢化も進んでいます（平成17年9月末から平成21年9月末までに高齢化率が市全体では25.5%→28.6%、広地区では18.3%→20.4%）。住民の高齢化への対応、良好な子育て環境の実現が、地区の課題となっています。

2004年に発足した「おいもを愛する会」は、こうした地区の状況を背景に小学生、住民とともに芋類の栽培育成を行い、その中で人々のつながりを育み、互いに助け合うまちづくりをめざして活動してきました。活動を通じて、芋苗の提供者、畑作・料理・イベントのボランティア参加者、地元大学生、自治会、行政、NPOとのネットワークが形成されてきました。現在わずか200㎡程度の小規模な畑作ですが、この取り組みは子ども・高齢者の交流を生み出し、子育て環境向上に寄与しています。

こうした取り組みをさらに広げるため、地区内にある「潜在的な畑」を掘り起こし、また栽培した「おいも」を利用した活動、イベントを行い、「畑」や活動場所を「おいもラブ・ステーション」として地区内外のネットワーク化を図ることをめざします。

### 【団体設立経緯】

「おいもを愛する会」は、2004（平成16年）12月に設立しました。“おいもでつなげよう地域の輪”を合言葉に「地域交流・であい・ふれあい・おもいあい・支えあい・愛・絆・人権・平和・なかま・つながりの輪」を築こうとする団体です。地域に根ざしたさまざまな活動を展開することによって、住民同士が協力しながら交流を深め、お互いを理解し合い支え合い、お互いを尊重しあえる「なかまづくり」をめざしています。

地域に暮らす全ての人々のつながりの輪を広げ、誰もがこのまちに生まれてよかった、このまちに住んでよかったと心から思える「幸せなまちづくり」をめざしています。地域に多く住む外国人市民とも、交流を通して異文化の中で暮らす人々の気持ちや立場を知り共通理解を深め、より良い人間関係を築き学びあいます。

2009年は「夢や思いやりにあふれ、互いに助け合う、みんなが住みよいまちをつくらう！」を合言葉に、「ひとづくり・まちづくり事業」を実施し「人権尊重のまちづくり」について考え学びました。今年度は「おいもラブ・ステーション・プロジェクト」を活動のテーマに、「畑友だち」を増やし交流を深め住民の高齢化への対応と育児に悩む保護者を支え、良好な子育て環境の実現に向けて、現在0歳から92歳までの幅広い年齢の会員で活動しています。



## 【活動の進捗状況】

### 1. 概要

今年度「おいもラブ・ステーション・プロジェクト」を企画しました。まずは「まち中はたけ探検隊」を募集し調査をしました。まち中でおいも畑を増やし、畑づくりの得意な地域の人に教わりながら「さつまいも・じゃがいも」を植え育て・収穫を通して自然のすばらしさを子どもたちと共に体験し、豊かな感性を育て、夢や思いやりにあふれ、互いに助け合う、みんなが住みよい幸せなまちづくり、一人ひとりが尊重し合えるコミュニティづくりをめざしました。収穫した「じゃがいも」は、子ども・保護者・地域の人と一緒に「料理教室」や呉市の機関と連携して開催する夏の収穫祭「じゃがちゃん祭り」などで使用し、歌・楽器演奏・踊り・フラダンス・空手等、専門的な分野で活躍されている団体と連携し交流を深めました。また、4月から募集を開始し結成した「おいも育て隊」会員には「じゃがちゃん祭り」当日、「さつまいもの苗」を配布しました。畑は無いけど家で育てたい会員には、20kgの土を提供し土袋の中でさつまいもの苗を育てることを体験してもらっています。今年は、猛暑で悪天候でしたが、なんとか育っています。さつまいもの苗の成長を確認し繋ぐ方法として、会員全員に往復はがきを出したり電話・メール等で交流を深めています。11月中旬頃が収穫の時期です。11月23日開催「広教育祭」「市民活動メッセ」や12月5日に開催する秋の収穫祭・第7回ふれあい地域コミュニティ文化祭「おいもちゃん祭り」には、おいも汁・おいもご飯・おいもパン等のおいも料理と歌・楽器演奏・踊り・ダンス・空手等の披露、作品展示等々で交流を深めます。子どもを中心とした「子どもの体験交流活動」は、会員の指導者だけではなく地域の物作りの得意な人の協力のもと、四季折々の様々な体験活動の機会を充実させました。同時に学生ボランティアの育成を行ないました。また0歳児～未就学児と保護者の会「親子ふれあい広場プチボテくらぶ」を中心に子育てについて考え交流を深め、子育て環境の充実をめざしています。これらの活動を通してお互いを理解し、人として尊重しあい地域全体の人々の「つながりの輪」を広め、誰もが幸せだと心から思えるように、子どもを中心に地域コミュニティづくり・ネットワークづくりなど様々な活動を推進しています。

### 2. 活動内容

#### 芋類栽培

畑友たちと「おいも育て隊」会員と地域の子どもたちと大人と一緒に畑作りから始めて、じゃがいもやさつまいもを植えて育て、自然に親しみ収穫を喜ぶ心と心のふれあいにより、互いに向上し、いけるすばらしさを心と身体で体験しました。

#### 体験交流教室

「子ども体験交流教室」「親子ふれあい広場」を開催し交流を深めました。ネットワークを広め、新しい発見と体験を通して学び、自然と人間の関わりや、ともに助け合いながら過ごす仲間とのコミュニケーションについて考えました。また自主性・協調性を育み未来の社会人として「知識と教養」と「生きる力」を身につけることを目標に、同世代の親子が持っている悩みや思いを出し合い交流を深めて、子育て環境の充実をめざしました。



## 地域コミュニティづくりイベント

地域の子どもや大人で植えてた「じゃがいも・さつまいも」を活用し、地域コミュニティづくりのイベント事業を開催して、様々な「おいも料理」で地域社会の人と人をつなぎ交流を深めました。また、広地区に多く住むブラジル人の子どもたちや保護者の協力を得て、ブラジル料理を通して食文化の紹介や地域交流の場を共に築きました。

7月4日「じゃがちゃん祭り」

場所：呉市広会館 参加人数：350名

内容：

じゃがいもを使った調理（カレーライス・コロッケ・フライドポテト・ブラジル料理）と販売。会のマスコット人形「じゃがちゃん・おいもちゃん」販売。「ふれあいステージ」での催し物（歌・踊り・空手・健康予防体操等）、クイズ大会、抽選会。「子ども広場」での風船アート・ホールインワンゲーム・ブラバン。「絵てがみコーナー」での作品作り。

## 事務局会

定期的に事務局会を開くことで、会について今後の方向性や、目的に向かって進んでいるかを話し合う機会を設けました。計画を会員で確認することで意思の疎通を図り、それぞれの気持ちを共有して活動に広がりをもたせました。

## 会機関誌発行

「おいもを愛する会」の機関紙「つながりの輪」を定期的に発行することにより、広く地域に「おいもを愛する会」の活動を知ってもらい、協力や参加を呼びかけました。2010年4月～2010年9月末までに合計8号を発行しました。

## 町中はたけ調査

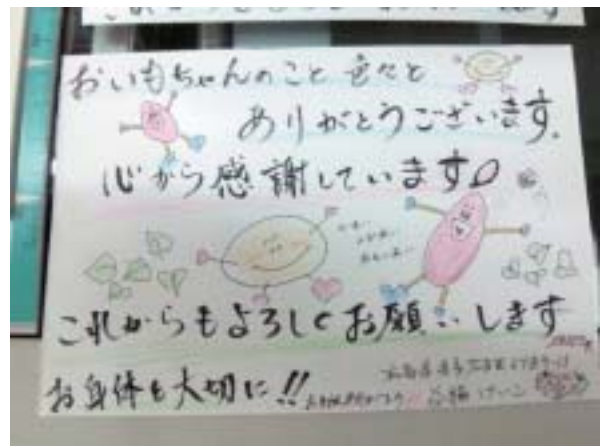
本調査は、広島国際大学の大学生を中心に組織した「町中はたけ調査隊」により、広地区（広名田2丁目、広白岳2～5丁目）に現存する畑作地の現状を把握するための悉皆調査です。

調査は、2010年4月～5月上旬に予備調査、調査範囲・調査方法の検討を行い、5月中旬～6月上旬に本調査、6月中旬～7月上旬に調査データ整理を行いました。調査隊は、広島国際大学工学部建築学科橋本研究室の学部生を中心に構成し、調査方法は、調査範囲の道路に沿って調査ルートを設定し、そのルートに沿って調査員が2名1組で畑作地を探索する方法を用いました。探索の際には調査員の一人が、位置確認のためGPSロガーを持ちながらデジタルカメラで撮影し、もう一人が撮影した場所を地図上に記録しています。調査対象とした畑作地は、水田を除く「畑」および「畑にできそうなオープンスペース」とし、個人宅に作られた「菜園」も含むこととし、アスファルト、コンクリートで舗装された「駐車場」、菜園でない「花壇」は除外することとしました。

本調査の結果、約150箇所の畑作地を抽出することができました。これらの結果は、撮影した画像をベースとした「町中はたけ台帳」にまとめるとともに、WEB上にある無料の地図ホームページを利用して、関係者が位置を閲覧できるようにしています。

## 【その他参考となる事項】

「男女共同参画パネル展」(呉市人権センター主催)において、「おいもを愛する会」活動報告パネルの展示および活動報



告を行いました。

看板制作については、「おいもを愛する会」会員で物作りの得意な人と看板業を営んでいる人のアイデアで、使用済みのペットボトルを利用した風車付きのクルクル回る看板の見本が完成しました。とても可愛らしく思わず笑顔の出る看板です。10月から畑友だちの畑などにも看板を作成します。

じゃがちゃん・おいもちゃんのマスコット人形が人と人を繋ぐ役目を果たしています。じゃがちゃん・おいもちゃんマスコット人形を鞆などに付けて歩いていると「あっ可愛いね、どこで売ってますか？」と聞かれた時が、繋がるチャンスです。マスコットの説明をすることで、「おいもを愛する会」を知り、繋がる輪が広がってきています。これからも、手芸教室を開催して「じゃがちゃん・おいもちゃんマスコット人形」を市民に広めます。

じゃがちゃん・おいもちゃん祭りの歌がYouTube ネットで流れています。この歌を聴いて問い合わせがあります。8月には、福岡県筑紫野市立天拝小学校2年生の先生から電話をいただきました。

2年生81名でさつまいもを育てているそうで、生活発表会で、是非「じゃがちゃん・おいもちゃん祭りの歌」を使わせてほしい・・・という問い合わせでした。さっそく、じゃがちゃん・おいもちゃん祭りの歌のCDとマスコット人形を送付しました。とても喜んでいただきました。

この歌が出来た経緯は、「おいもを愛する会」に参加し始めた関西出身の主婦が、親元を離れて広で生活するうえで色々な不安を抱えていました。私たちの呼びかけで行事や活動に参加するようになり、元気に楽しく生活する日々を取り戻し、育児しながら三味線を弾くまでに復活しました。その感謝の気持ちとして、大学時代の友達に相談し作っていただき、「おいもを愛する会」へプレゼントしてくださった歌です。私のほうこそ元気をいただきました。心から感謝し大切にしていきます。出会った頃は大丈夫かな・・・と心配でしたが、今では、とても遅く元気に活躍されています。「であい・ふれあい・おもいあい」の心で、これからも多くの人と繋がり笑顔あふれる幸せなまちづくりを一緒にめざして行きます。



# 特定非営利活動法人街なか映画館再生委員会(新潟県上越市)

活動テーマ：【感動の宅配便】世界館キネマデリバリーサービス構築

## 高田世界館発の映画デリバリーサービスを準備中！

### 活動地域の概要

上越市は、新潟県の西部に位置し、1971年に高田市と直江津市が合併してできた現在人口21万人のまち。高田地区は上越市の山側（南側）で城下町として栄えてきた地域である。高田地区には、合計の長さが日本一の雁木が残されており、雁木のまちとしても有名である。明治になり、製造業だけでなく、流通、教育、文化面でも栄え、陸軍第13師団があったことから軍関係の施設や、軍関係者を対象にした様々な施設が立地した。この中に、高田世界館という映画館もあった。

戦後の高度成長期には、中心部の県道拡幅とアーケード設置が進んだが、世界館のある本町6・7丁目地域はその動きから取り残されていた。世界館は場末の成人映画館（高田日活）として、雁木と町家の残る界隈にひっそりと生き延びてきた。しかし、この界隈には最盛期に流行した擬洋風の建物もまだ多く存在しており、独特の町並みを形成している。



### 団体設立経緯

すでに建築関係者の間では「高田日活の歴史的建造物の意義」は認識されていたが、成人映画館ということから一般市民への意識付けと知名度は低かった。ところが上越TMOによる本町6・7丁目活性化事業として2001年8月5日に『景観劇場』を開催後、不定期ながらも民間主体のイベントが継続した。また、「週刊新潮」に現役最古の映画館として紹介されて、保存の気運が徐々に高まり始めた。

同時期に近郊の老舗映画館「中劇」が郊外シネコンとして移転し、市街地の映画館は成人映画の高田日活だけとなる。2007年に建物の老朽化を懸念した所有者から廃業の意向を聞き、有志により「街なか映画館」の再生保存・活用に向けて具体的な検討と再生活動資金の募金運動が始まる。平成2008年、有志10名が「街なか映画館再生委員会」を組織し、同時に建物修繕を目的とする「サポーター会員」の募集も開始する。その後、団体発足記念イベント「景観寄席」を開催し、保存活用運動を大きくアピールした。

建物は平成2009年2月、経済産業省より「近代化産業遺産」の認定を受けた。さらに、2010年12月、文化庁から登録文化財の指定を受ける。街なか映画館再生委員会は、所有者からの無償譲渡を受けて「高田世界館」の修繕と維持管理を目的として、自主企画と貸しホール事業を展開している。



【活動の進捗状況】

1. 『四九市映画』 名作映画のワンコイン上映活動

- ・上越市視聴覚ライブラリーの協力により、名作DVD作品を低価格で上映。
- ・四の付く日が洋画、九の付く日が邦画、午前10時と午後2時から上映。
- ・名作映画への期待とお客様の反応を見ながら、リピーターの定着をめざす。

- 4月 洋画「ローマの休日」 邦画「東京物語」
- 5月 洋画「駅馬車」 邦画「晩春」
- 6月 洋画「シャレード」 邦画「お茶漬の味」
- 7月 田中絹代特集 邦画「武蔵野夫人」「お遊さま」
- 8月 洋画「シェーン」 邦画「丹下左膳余話・百万両の壺」
- 9月 洋画「黄昏」 邦画「一人息子」
- 10月 洋画「自転車泥棒」 邦画「長屋紳士録」
- 11月 洋画「誰がために鐘は鳴る」 邦画「青い山脈・前後編」 予定

特別上映

- 5月 直江津三八朝市祭・頸城倉庫で「青い山脈・前後編」上映
- 10月2-3日 高田メッセ・キックオフイベントで「風と共に去りぬ」4時間一挙上映
- 10月7日 直江津中学生徒5名のボランティア体験で「ローマの休日」を上映。お客様の案内と切符販売、館内清掃を体験し、映画も鑑賞。あわせて「フランクシュタイ」16ミ映写機の操作法を教える。

一般上映会

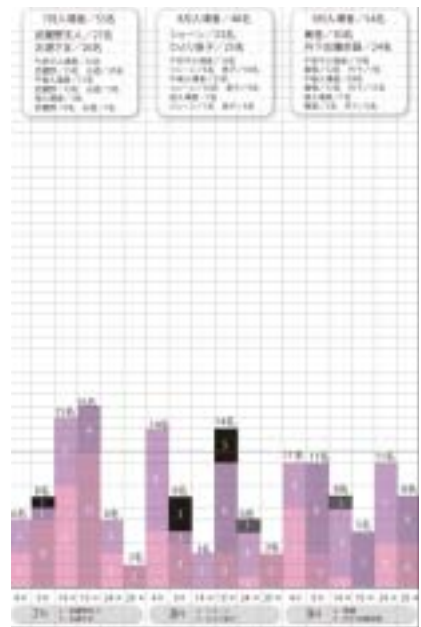
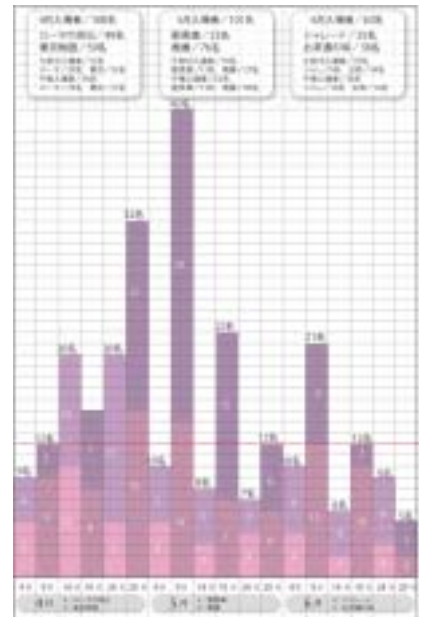
- 8月1日 「未来の食卓」 1日4回上映 140名入場
- 5月30日 「牛の鈴音」韓国のドキュメンタリー映画 約90名入場
- 9月5日 「アンを探して」上映
- 10月31日 「RAILWAYS」 上映予定

2. 映画以外のイベント（貸し会場事業含む）

- 4月10日 落語 金原亭馬遊独演会 45名入場
- 6月2日 「中村中」コンサート 入場者145名
- 6月8日 「クラムボン」コンサート 入場者250名（満席補助椅子）
- 7月29日 上越親子劇場三味線と怪談の夕べ（入場約150名）
- 8月11日 「仲井戸麗市」コンサート 入場者100名
- 9月11日 「ピーター・バラカン」出前DJ-vol.3 入場者90名
- 9月12日 市内の東本町三丁目敬老会イベント歌と踊り 約100名参加
- 9月26日 地元民謡教室主催の「華かおりコンサート」約200名（満席）
- 10月9日 「三遊亭白鳥&モロ師岡」ジョイント寄席 約80名
- 10月16日 スイングタイム in 高田世界館 ジャズ 約60名

3. 映画館の広域連携

「長野善光寺近くの権堂アーケード街にある長野ロキシー映画館が、明治中期の建物らしい。」という調査報道を聞いて、昨年度より交流を開始しました。今年は5月9日に長野より24名の



Class Theater 2018

# 世界館清掃

Project 隊員募集

6月12日(土)

100名

世界館

電話 / 090-2562-4475 (受付) 025-525-6990 (フーデブ)

団体が世界館を訪問し、小津安二郎監督の「晩春」を鑑賞しながら、双方の映画館運営について語り合いました。

上越 - 長野間は75キロ、高速で1時間弱という近さですから、協働イベントに発展する可能性が高く、相互の訪問による交流を進めています。

#### 4. 館内大掃除プロジェクト第2弾

6月12日 昨年と同じく、ボランティアの館内大掃除に、18名が参加。10月30日に本年度2回目を予定（隙間風対策の目張り作業とも）

#### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

##### 1 四九映画・小津監督作品の手ごたえ

出だしの4-6月はワンコイン定期上映が新聞紙上でも話題になりましたが、特に小津安二郎監督作品が安定した集客を記録しています。平日は高齢者中心ですが、女性層にリピーターが多くなってきました。休日などには若い人も見られます。特にモノクロのスタンダード作品が世界館の雰囲気似合うことを発見しました。モノクロ洋画の場合は、字幕版よりも吹替のほうが見やすいといわれました。

パブリックドメインDVD版で、字幕・吹替の選択が可能なこともメリットです。

##### 2. 上映中に震度5の地震発生！

10月2-3日には新潟県上越地域を震源とする震度4-5クラスの地震がありました。世界館では「高田スネッサンス百年記念キック・オフ・イベント」で、「風と共に去りぬ」のDVD上映中でした。被害はありませんでしたが、2階席は揺れがあったため、「この建物は怖いから帰る」というお客様が3名いました。4時間に及ぶ長編映画でしたが、効果的なイベント情報で、86名入場（2日間）と健闘しました。

テレビの地震速報や防災無線、防災ラジオ放送があったため、遠方より多くのお見舞いをいただき、ありがとうございました。

#### 【今後の予定】

##### 1. 館内の必要装置の整備

映画館であるため、現状はホールが暗くてコンサートや講演会などの多目的利用が困難でした。ステージ・客席照明の整備として、上越市地域活動支援事業を受けて、改修を進めています。ホール内は段差のない緩い斜面ですが、上映終了時などは明るくして危険防止に努めます。

また、昨年故障した35mm映写機専用の音響設備を整備し、暗幕開閉設備を更新しました。あわせて劇場映画16mm映写機のワイド画面用レンズも探しています。DVDメディアの普及で今ではマニアの収集品が中古品しかないようです。

#### 【事業化への展望】

##### 1. キネマデリバリー準備活動（今年度特別助成テーマ）

4月から始めた「四九市映画」と各方面への助成・補助金申請業務に岸田代表の起業から新規出店が重なり、キネマデリバリーサービス事業への取り組みが遅れています。

しかし、10月に入って16mm映写機講習会に参加、映写機点検を行い、対象となる市内の高齢者施設に向いて、無料体験上映



会を行う予定です。まず対象施設の上映環境を調査し、施設のご希望を聞くと共に、老化防止と映画の効用に関する意見から、1時間程度の短編喜劇作品とあわせて昭和30年代記録映像を予定しています。

これから寒くなりますので、世界館での上映から出張上映にシフトする計画です。再生委員会メンバー以外のスタッフ、協力者（候補者あり）とも調整して、デリバリー計画を進めていきます。



# 特定非営利活動法人グローバルヒューマン（滋賀県高島市）

活動テーマ：農山漁村の街づくりと地方に根付く収益モデル事業構築

## マキノ町で元ホームレスらが主役の地域再生事業を展開中！

### 【活動地域の概要】

日本に二つしかないカタカナの町、日本のさくら名所百選のひとつ、琵琶湖八景のひとつ、日本唯一の湖岸石積みで重要歴史的景観に選定された町・マキノ町海津は、古くから北海道・北陸・京都を結ぶ街道・湖上交通の要所として、輸送や商業活動、それに携わる人々の流通・往来が生み出した極めて重要な歴史的景観が残る街である。水路と陸路の結節点、琵琶湖の「津」として発達した湖北の都市的要素、集住・商業の場として顕著な特徴を現在に留めると共に、琵琶湖の原風景である湖岸の水辺風景を背景に、農・山・漁村の3つの特徴を併せ持つ歴史ある街である。

然しながら、現実には、中山間地域過疎高齢化が急速に進み、消滅の恐れのある集落が3箇所、10箇所の限界集落、33箇所の準限界集落が存在する。加えて、農業の不採算性、高齢化などにより滋賀県全農家31,300戸の30%に当たる9,100戸が「何も作らなかった。何も作れなかった。」状態で田を長期間放置し、現在、2,600haもの田が耕作放棄地として荒廃化しているばかりか、その48%が原野化し、既に農地としての回復が困難となっている。

(当該事情は、当地域に限ったことでは決してない。全国地方の共通課題でもある。)

### 【団体設立経緯】

平成4年4月、京都府南丹市の市街地で20余年間放置され、荒廃の一途を辿っていた旧団地の再整備事業、周辺地の自然環境整備事業、地域の再生、地域活性化を主たる目的に「グローバルヒューマン」を創設し、民間力だけで街づくりを完成。現在、南丹市最大の街になるまで大成功した。

以降は、日本固有の伝統技術・技能を修得・研鑽し、継承するため、地域住民と一体化した協働システムを構築すると共に、社会的弱者と呼ばれる人達の自立生活・社会復帰支援活動と、地域の再生、日本の原風景と生態系の回復・再生・保護・保全事業を展開し、平成16年10月、当NPOを法人格化した。



## 【活動の進捗状況】

### 1. 完成した全国初「100%民間力の地域コミュニティハウス」への移住披露と活動

貴財団のご協力を得て、かつてはホームレス・ニート・ネットカフェ難民・派遣切り・生活保護者・同予備軍と呼ばれた人達自らの手による古民家3棟大改装工事がようやく完了、大変立派なコミュニティハウスが堂々完成した。

平成22年5月1日、彼らの移住紹介を兼ね、「地域コミュニティハウスとおしゃべりサロンのオープン記念イベント」を大々的に開催し、寒村で荒廃化した古民家でも、手の加え次第で見違える「お洒落な地域交流ハウス」にリニューアルできること、ホームレスと呼ばれる人達は決して「怠け者」ではなく、就労機会と就労場所さえあれば「プロ職人」として大活躍できること、勿論、家屋修理も楽々可能であることなどを実証披露して、大いなる賞賛を受けた。

同日、滋賀県立大学教授・大学院生らによる「琵琶湖固有水生植物の生態系再生野外講義」、地元小中学生による間伐材のマキ割り体験、住民による抽水植物の植栽体験会を並行開催し、来訪者に一般聴講して貰うと共に、元ホームレスらによる賑やかな屋台村を開店して、「低カロリー・高タンパクのジビエ料理（獣害で忌み嫌われる鹿・猪の狩猟肉有効利用の実証） 琵琶湖淡水魚の天婦羅料理（淡水魚食文化の復活）、手作りおはぎ（里山の味覚再現）」など、多くの来場者に振る舞い、大好評であった。（ホームレスが地域住民から炊き出しを受けた話は良く聞かすが、元ホームレスが地域住民に炊き出しや手作り料理を振る舞った話は、日本、いや、世界で最初？）

同イベントで大活躍した「元テキヤ業」の職歴を持つ数名を始め、彼らがイキイキと、また、テキパキと明るい表情で作業をこなす姿を見て、現地見学に来ていた弁護士・行政・他NPO団体スタッフなどが口を揃え、「事業の主役が彼らであることがよく分った」と理解してくれたのが、何よりであった。

加えて、このオープン記念イベントを機に、彼らと地域住民との距離がいきなり縮まったのか、朝夕の挨拶は勿論のこと、彼らと住民双方の表情が明るく、且つ、まるやかになった感じがするのは、当スタッフの気のせいであろうか？

（我々の最終目的は、都会の家庭・職場・社会から弾き出された主役の彼らが、疲弊・少子化・過疎化に苦しむ農山漁村との交流事業を通じ、自立生活・社会復帰支援してくれることに加え、地方の活性化を志すものである。我々も道のりの半分をようやく歩けたのか？）

### 2. 耕作放棄地・休耕田を新たな養殖田に築田し、事業運営

農家から借り受けた耕作放棄地・休耕田を、地域の海津漁業協同組合、滋賀県水産試験所の協力を得て養殖田に築田し、環境省レッドデータブック絶滅危惧種1A類指定のホンモロコと抽水植物の共生養殖田（日本初の農・漁業複合型養殖田）を運営する基盤がほぼ出来上がった。\*

現在、耕作放棄地は全国で39万ha、埼玉県全体面積に匹敵し、



\* 琵琶湖内水面漁業も高齢化が進み、漁獲高の激減、漁業不採算性による後継者不足が顕著となった。特に琵琶湖固有種「ホンモロコ」は、1974年の372トン捕獲をピークに、ブラックバス・ブルーギルの外来種による捕食、ヨシ原の減少等で捕獲高は30年間で60分の1、僅か6トンに激減し、その生態系すら危ぶまれ、環境庁レッドデータブック最高ランクの「絶滅危惧種1A類」に指定。今や成魚100グラムの卸値は300円、甘露煮炊きにすると100グラム1,200円で小売される、正に幻の淡水魚、高級魚となっている。

日々、拡大している。本事業地の滋賀県高島市でも、農業の不採算性、高齢化、少子化、過疎化により、耕作放棄地が加速的に拡大しており、一向に歯止めが掛らない。現在、地域農家も当NPO法人事業に大いに注目するが、養殖田の提供希望者が増えている現状を考える時、地方で真摯に働く農家の切ない想いが迫ってくるのを禁じえない。

### 3. 絶滅の危機に瀕する琵琶湖固有種ホンモロコの採卵・孵化・給餌・育養活動

養殖中の親魚からホンモロコ 100 万粒の孵化・採卵に成功し、現在、畜養池や新たに築田した養殖田で仔稚魚を育養中である。本年度もほぼ順調に生育しており、ほどなく成魚となり、養殖田の落水、一部販売、琵琶湖への一部放流も間近に迫っている。

来年度は、日本初の「農・漁業複合型養殖田」による抽水植物とホンモロコの同時並行無給餌養殖が始まる。これまでの当NPO法人シンクタンクデーターや外部識者の意見を取り入れながら、早期達成に尽力したい。

#### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

本年7月中旬、全国的異常気象による集中豪雨がここマキノ町にも来襲、「日本さくらの名所百選・海津大崎の桜」で崖崩れが発生し、沿道の観光料理・土産物店を一部破壊・床上浸水した。その被害者からの緊急援助要請の第一報が、何と元ホームレス・同予備軍で組織する「再チャレンジ・夢工房隊」にもたらされたのである。

地域コミュニティハウスで従事していた夢工房隊は、当NPO法人所有のコンボ重機、ダンプ車、トラックを緊急出動させ、土砂除去用工事ホース等を駆使して「日頃鍛えたプロの腕(?)」を披露する場面が早くも訪れた。

計5日間、土砂の撤去、前面道路の整備、店内の泥除去、建物・建具の修理、清掃業務等を親身になって貫徹し、皮肉にも温暖化がもたらしたであろう異常豪雨災害を通じ、被害者は勿論のこと、地域に彼らの存在価値を大いに知らしめた結果となった。

#### 【今後の予定】

##### 1. 耕作放棄地から、「琵琶湖抽水植物と固有魚の共生養殖田化」面積の拡大

当該地における耕作放棄地の養殖田化は、当初予定していた面積を大幅に超え、既に 16,639 m<sup>2</sup> に達する耕作放棄地の提供があった。今後、抽水植物の品種選定に加え、共生養殖田化を本格的に稼働させるためには、当初予定面積を更に拡大化しなければならなくなって来た。

地域活性化の期待を担い、同時並行的に貧困者の雇用機会を拡大するには、事業規模の拡大が不可欠であるが、当然、当NPO法人の経済的事業基盤の拡大を必要とし、同対応が急務となった。

##### 2. 元ホームレスらの受け入れ人数の増員

高齢化問題・少子化問題も極めて深刻であるが、当NPO法人が長年のテーマとして警鐘を鳴らし続けてきた「貧困者・社会的弱者の雇用対策」が喫緊化している。

2010年6月の生活保護費受給者数は190万人を越え、毎月2



万人単位で増え続けている。働きたい、働く能力があるのに働けない、ハローワークへ求職活動に2年も3年も通うが、「学歴が低い、連帯保証人がいない、離婚歴が有る、多重債務者である、住居が定まらない・・・」を理由に断られ続け、全く就職できない人達が全体の3分の2もある。当然、勤労意欲は萎え、身体も鈍って、「パチンコ通い、テレビが友人」生活を繰り返すこととなるのである。

現在、当NPO法人は、大津市からの委託により「就労意欲喚起支援等事業」を年間500人/延べ日で受託している。前職は「左官、大工、瓦職人、鷹職人、庭職人、重機のオペレーター、運送会社運転手、・・・」など様々であるが、彼らは押しなべて優秀である。何故、彼らがホームレスや生活保護者にならなければならなかったのか、本人ですら未だに理解できないのが現実である。

幸いにして、当NPO法人のささやかな事業による社会的挑戦が順調に推移し、雇用機会と雇用場所を拡大している。耕作放棄地提供者の増加に伴い、事業規模の拡大が不可欠となった。

### 【事業化への展望】

#### 1. 淡水魚の無給餌養殖法の確立

琵琶湖固有種ホンモロコ（年魚と言われているが、オスは4年、メスは6年生きる）と抽水植物と同時共生養殖することにより、言わば「天然のミニ琵琶湖環境」を創設、ワムシやミジンコなど動物性プランクトンを大量に発生させる無給餌化を確立すると共に、来年度には自然産卵から採卵後、自然孵化・自然増殖を可能にする生態系循環メカニズムを構築・確立して、再チャレンジ夢工房隊に技術継承したい。

#### 2. 地域資源の農商工連携の確立

本事業の更なる発展を展望し、地域の花卉栽培農家、琵琶湖内水面漁業者、甘露煮炊き等の製造業者・加工販売業者、花卉卸業者らと連携・協働を図り、琵琶湖湖畔独特の生産加工技術、消えつつある淡水魚食文化の復活を実現する。

即ち、「農商工連携」、「第1次産業の第6次産業化」による地域全体の再生・振興・活性化を具現する基盤作りを行い、技能習得することにより、地域での再チャレンジ夢工房隊存在価値を一層高め、彼らの活躍の場の拡大を図りたい。

#### 3. 本事業の産業観光化

当該地周辺には、日本のさくら名所百選「海津大崎のさくら」、県指定天然記念物・マキノ町アズマヒガンザクラ「清水の桜」、文部科学省選定の重要文化的景観「海津・西浜・知内の水辺景観」（夢の森を含み1,842haの広大な面積）が点在する。

荒廃化した耕作放棄地を有効利用し、花卉栽培・ホンモロコ養殖による田園・水辺風景の観光産業化により、「里湖・海津四季の花海道」を創設し、琵琶湖の原風景、日本の原風景の再生を目指す。



# 白保村ゆらていく憲章推進委員会（沖縄県石垣市）

活動テーマ：ゆいまーるの心で、ゆらていく村づくり事業

## 白保村で島おこし事業を展開する NPO 法人設立準備中！

### 【地域の概要】

白保村（石垣市字白保）は、石垣市（人口4万9千人）の東部（石垣島の南東部）に位置する1,600人ほどが暮らしている集落である。村の東に広がるサンゴ礁は世界的に知られ、2007年には国立公園海中公園地区に指定されている。

1979年に発表された新石垣空港建設計画に端を発する一連の空港問題では、「賛成」「反対」で村を二分する困難な時代もあったが、1995年には一つにまとまり、村の団結に向けて公民館活動が進められている。

白保村は、石垣島一の農地面積を誇り、古くから農業・畜産業の盛んである。また、文化や芸能活動も活発で、公民館を中心に、豊年祭やハーリー祭、種子取祭などの伝統行事に取り組んでいる。石垣、福木、赤瓦などの伝統的な集落景観が多くの人々を魅了し、島外、特に他県からの移住者が増加している。新規住民が増加し、価値観やライフスタイルの多様化が進む中で、新たな村づくりが課題となっている。

### 【団体設立経緯】

2007年2月白保村ゆらていく憲章推進委員会が設置された。本委員会は、2006年に白保自治公民館によって制定された白保村ゆらていく憲章を単なる絵に描いた餅に終わらせず、具体的な村づくりの推進を図るために公民館の専門委員会として設置された。現在、20人で活動を行っている。

憲章推進委員会では、憲章の周知と村づくりを担う人材育成、集落内の景観保全、文化遺産の保護の推進、既存団体の取り組みの支援などに力を入れている。



## 【活動の進捗状況】

### 1. 事業推進体制の確立（白保学講座の開講）

#### 概要

NPO ゆらていく設立に向けた勉強会の開催。白保集落内から受講生を募り、沖縄県下の離島をはじめとする地域興し、島興しの事例を研究することで、地域づくりの核となる法人組織の必要性やその自立を図るためのノウハウを学ぶ。特に、沖縄本島周辺の島興し事例等の情報提供を得るため、沖縄大学地域研究所と連携を図りながら実施することとした。

#### 受講生

白保集落居住者を対象に、憲章だより等で受講を呼びかけたところ、45名の受講生があつまり、講座を開講した。

#### これまでの講義概要

- ・ 第一回講座「徳島県上勝町における町おこしの取り組み」  
講師（有）環境とまちづくり 澤田俊明代表、坂本真理子主任研究員  
上勝町における棚田保全活動として、重要文化的な景観への指定や棚田オーナー制、ワーキングホリデーなどの仕組みを学んだ。また、上勝町の地域づくり活動として、葉っぱビジネス「いろどり」や千年の森づくり活動、ヤッホー調査隊の活動などを紹介いただいた。
- ・ 第二回講座「沖縄県下での民間組織による地域づくり事例」  
講師 沖縄大学地域研究所 稲垣 暁氏  
渡名喜島「株式会社福木島となき」による古民家再生の取り組み  
伊是名島「NPO 法人島の風」による古民家再生の取り組み  
波照間島「波照間もちきび生産組合」の取り組み 等の紹介をいただいた。
- ・ 第三回講座「景観地区」とは  
講師 石垣市都市建設課計画係 砂川 栄秀係長  
石垣市が取り組む白保地域での景観地区指定について、事業導入に先立ち法律の内容についての解説をいただいた。
- ・ 第四回講座「NPO 法人 西表島エコツーリズム協会の活動」  
講師 NPO 法人 西表島エコツーリズム協会 石垣 昭子会長  
西表島の自然環境と人の暮らしの現状と課題から、同 NPO の考えるエコツーリズムについて解説いただくとともに、協議会の具体的な活動内容を紹介いただいた。
- ・ 第五回講座「島の自然 古民家再生を活用した地域づくり」  
講師 株式会社福木島となき 南風原 豊社長  
会社設立の経緯や運営状況を含めて、取り組みの詳細を解説いただいた。古民家再生・利用を核として、島を守ること、大きな開発をしないことを基本に、島民全員が参加する組合方式での地域づくりの目標などについて学んだ。

#### 講座の成果と課題

毎回受講生が 20 名程度と出席率が思わしくないが、具体的な事例を学ぶことで、村づくりの必要性や組織的な取り組みの有効性などについて理解が深まっている。

当初、10月にNPO法人設立申請を行う予定であったが、地域NPOとしての位置づけを得るためには、自治公民館運営審議委員会の中で検討を深めるとともに、公民館総会でその設立について



承認を得る必要がある。次期総会は2011年5月頃となることから、NPO 法人設立申請は、それ以降にずれ込むこととなる。

今後、更に事例研究を続ける中で、地域 NPO 法人設立に向けた機運を高めて、自治公民館の総会に諮り設立を目指したい。

## 2. 事業ノウハウの確立

### 既存商品の改良

7月12日地域特産品開発の推進に関しては、沖縄県東村や南大東島、慶良間諸島などの地域プロデュースを手がけるノイズバリュー我喜屋氏を白保出身のテキスタイルデザイナー MIMURI とともに訪問し白保日曜市商品のパッケージデザイン等について協議した。

その後も MIMURI と協議しながら白保地域づくりの方向性に沿ったデザイン等の検討を行っている。10月3日には、MIMURI とともに白保日曜市の既存商品のチェックを行い、パッケージデザインを行う商品の絞込みを行った。

### 今後デザインを検討する商品

- ・白保日曜市の全体ロゴデザイン
- ・白保織友の八重山上布の小物やミンサー織りの商品
- ・大泊きみ子さんの黒紫舞（古代米）のパッケージデザイン
- ・赤嶺マサコおばあーの米味噌のパッケージデザイン

### 特産品・工芸品の開発指導

地域課題でもある畑からサンゴ礁への赤土流出防止を支援するために、畑のグリーンベルト植栽に使用される月桃の商品化を検討した。その結果、月桃の葉や茎から精油やミストを抽出して販売することとなった。上半期では、加工に携わるグループの立ち上げを模索してきた。加工グループの目処が立ったため今後、加工設備の購入・設置（別予算）を行い、試作品の製造を行う予定。

## 3. 事業基盤の整備

借り上げ予定であった古民家を大家さんが別の方に貸してしまったために本項目については未着手である。今後、別の空き古民家について借り上げの相談を行う予定。

## 4. モデル事業の実施

### 修景事業部門

上期には、石積みは実施していない。ただし、福木の種の収集をしており、苗作りに着手する予定。

### 地域特産品開発・物販部門

毎月2回白保日曜市を開催した。売上の10%を共同運営費用として積み立てている。

### 地域人材・資源活用型交流事業部門

4月にWWF 会員ツアーの受入を行った。白保魚湧く海保全協議会での海垣漁体験と白保日曜市メンバーによる郷土のお菓子作り体験を行った。

7月には、白保～鹿島ふるさとの海子ども交流会を行った。白保魚湧く海保全協議会でのシュノーケル観察会と白保日曜市メンバーによる郷土のお菓子作り体験を行った。

10月7日には、大阪府立門真なみはや高校の修学旅行を受け入れ、集落案内及び白保日曜市メンバーによる郷土のお菓子作り



体験を行った。

- 環境保全・文化継承・コミュニティ支援部門
- 漆喰シーサーづくり  
集落景観形成の一環として進める一軒一軒シーサー運動活動として、8月22日に白保中学校生徒を対象としたシーサーづくり教室を開催した。
- 農と緑の風景づくり活動  
7月に、50m 300本の月桃植えを実施した。また、9月には、イトバショウ 100m 80本を植栽した。
- ゆらていく文庫読み聞かせ  
毎月第二日曜日に、白保公民館指定文化財となっている金嶺邸において、白保の就学前児童を対象とした読み聞かせ会を開催した。
- 白保学講座  
期間中5回の講座を開講した。



#### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

当初、借りる予定であった古民家を大家さんが別の方に貸してしまい、飲食・物販拠点の取得と修復の目処が立っていない。別の古民家について大家さんと協議を行う予定である。

また、NPO設立についても地域内での十分な合意形成を図るために、自治公民館の検討プロセスにあわせて進捗させるものとし、今年度内の申請を見送った。

#### 【今後の予定】

白保学講座を継続する中でNPO設立に向けた機運を盛り上げることとする。

地域特産品開発への取り組みが遅延しているため、白保出身のデザイナーとの連携により、パッケージデザイン等を実施したい。また、月桃の加工については、年内に設備の設置を行い、試作品の製造に着手する予定である。

古民家の借り上げ及びその修復については現在目処が立っておらず、今後、組織内及び地域関係者と協議しながら進めたい。NPO交流会以降、地域内での石積み継続の意向が強くなっている。

ただ、家主が費用を一部負担することは課題が多く、継続的な石積みのための予算確保を検討したい。また、白保学講座の講師招聘等で予算がかかることから場合によっては、予算を振り替えて実施したい。



#### 【事業化への展望】

当初の計画に比べ、進捗に時間がかかっている。これは事業化、法人設立を進めるためには、地域内での合意形成や機運醸成に十分な時間をかける必要性があり、ある意味で仕方が無いことだと考えている。形だけにこだわり拙速に法人を立ち上げることは避ける必要がある。

組織への地域の理解・協力を得ながら持続的に活動を続けることを目標としているため、じっくりと時間をかけて機運を盛り上げていきたい。

この一年間は、白保学講座での学習やこれまでそれぞれの団体が取り組んできた活動を更に継続しながら、お互いの連携を深めることを中心に活動したい。こうした着実な実績の積み重ねが地域の自信となり、事業化につながっていくと考えている。



# おたすけキッチン準備会（岩手県花巻市）

活動テーマ：食でつながる土沢コミュニティプロジェクト

## 地域の惣菜屋としてこっばら土澤への入店を準備中！

### 【活動地域の概要】

土沢商店街は、花巻市旧東和町の中心市街地に立地する。2005年に商店街で唯一の総合食品店が閉店し、地域に暮らす高齢者は特に不便を感じている。空洞化が進む商店街活性化の起爆剤として、また、昔の長屋のようにみんなで支え合いながら暮らし続けることを目的として、「新・長屋暮らしのすすめプロジェクト」が進められている。このプロジェクトは、商店街で老朽化の進む5軒の共同建替え事業で、花巻市東和町上町地区優良建築物等整備事業として現在建築工事が行われている。

### 【団体設立経緯】

- ・土沢商店街の上町地区で複合施設「こっばら土澤」の共同建替え事業に合わせ、地域の台所として地域に暮らす女性が起業して、テナントへ入居しようという機運が高まった。
- ・1ヶ月の開催期間中、1万5千人の来訪者が訪れる、まちなかアートイベント「街かど美術館（アート@つちざわ 土澤）」の開催期間中、平成2005年から2007年まで、「アットホーム亭」として日替わり店主の飲食店（コミュニティレストラン）を開店した。
- ・東北電力主催の「まちづくり元気塾」を通し、起業化に向けたきっかけづくりを実施。ワンデイシェフ（日替わり店長のレストラン）のコミュニティレストランと、当事業で実施している「おたすけキッチン」（惣菜屋）と2つのグループに分かれて、それぞれ起業に向けた取り組みを行うこととなった。
- ・「こっばら土澤」は2011年6月完成予定。それまで「おたすけキッチン」はチャレンジショップとして展開し、今後はNPO法人やLLC等の法人格の取得を含め、ひとつの事業体としての確立を検討している。



## 【活動の進捗状況】

### 1. チャレンジショップの実施

- ・チャレンジショップを4月から実施。猛暑の8月から9月にかけては、十分な冷蔵設備もないため衛生面での不安から、休業した。
- ・現在、毎週金曜日をチャレンジショップの日として、11時から13時まで営業を実施している。
- ・チャレンジショップの営業終了後、毎回スタッフ同士で反省会を実施している。
- ・営業にあたってはスタッフが営業の前日、チラシを地域住民に配布し、惣菜と弁当の予約を取っている。
- ・売上の面で言うと、単価の安い惣菜の販売だけでは苦しく、弁当が売上のメインとなっている。なお、弁当の売上は、花巻市東和総合支所（旧東和町役場）や事業所といった大口が大部分を占めている。口コミで、市民団体の昼食として、注文を受けることも多くなってきた。
- ・それぞれが家庭の主婦ということもあり、当初は味付けにばらつきがあったが、スタッフの一人をリーダーとして決め、安定化してきている。
- ・稲刈り時の繁忙期ということもあり、スタッフの人数が不足していたため、新たに2名の方をお願いし、協力していただいている。内、1名は飲食店の経験者ということで、いろいろな提案をしてもらい、作業の手際も以前と比べ比較的良くなってきた。
- ・協力していただいているスタッフに対して、少しではあるがパート代を支払うことができ始めている。
- ・調理及び準備が一番時間がかかるお弁当の構成もこれまで数多く作ってきたことで、1カ月程度のサイクルでパターン化できつつある。
- ・お客さんは地域に暮らす高齢者（特に女性）が多く、一人暮らしの所は特に、生活状況の声かけも兼ねて、丁寧な対応を心掛けている。
- ・宅配先は固定化しつつある。人手も少ない現況で、なかなか宅配先の範囲を広げられていない。
- ・店舗でのサービス（接客等）にお客さんから不満の声（おつりの計算が遅い、値札と販売額が違う、笑顔がない）が上がっている。スタッフの適材適所を活かした運営体制の確立が今後必要だと感じている。
- ・スタッフ側は楽しんで営業できているが、それがお店の元気ある雰囲気として、お客さんにうまく伝えられていない。

### 2. 経営計画の検討

- ・現在内装見積りを工事に会社に依頼し、初期投資に必要な金額の算出作業を行っている。
- ・初期投資に必要な資金について、借入を起さず、スタッフ及び関係者による出資金で何とか工面しようと考えている。
- ・中小企業診断士の木村裕美氏にアドバイスいただき、経営計画の検討を行っている。

### 3. 視察研修

- ・盛岡市の共同店舗「クロスステラス」に出店している惣菜店の調理場を見学させていただき、店舗内装や調理場のイメージを考える際の参考とさせていただいた。



#### 4. ホームページの作成

- ・活動状況を紹介するためにホームページを作成。お惣菜や活動状況の写真を更新している。

#### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

- ・「こっぼら土澤」に関連する補助手続き等が遅れたため、建築物の完成が6月となる見込みである。これに合わせ、おたすけキッチンの本オープンも6月までずれ込む予定である。
- ・お惣菜の予約を取りに地域を回っていたスタッフが偶然、お伺いした住居の様子がいつもと違うことに気づき、近くの人に相談し中を伺ったところ、高齢の家主が自宅で倒れていたという偶然的出来事に遭遇。すぐ救急車を呼び、何とか家主さんも一命を取り留めた。惣菜屋としてのみならず、高齢化が進む地域の見守り隊として、活躍した出来事だった。
- ・初期投資として必要な出資金について、スタッフで協議する機会を持ったところ、当初の予定通りにはいきそうにないことが判明した。中小企業診断士の木村氏に相談しながら、会員制を導入する等、資金繰りが比較的楽になるよう考慮し、多少、負担の度合いを調整する等して、何とか必要な資金を準備したい。
- ・設計者に概算見積をしていただいたところ、当初の資金計画よりも内装に思っていたよりも費用がかかりそうな状況である。今後、工事会社の見積書を確認しながら、仕様で削れるところは削減していきたい。

#### 【今後の予定】

- ・本田節さんにスタッフの人材強化や人間関係の構築方法について、ご助言いただきたい。
- ・これまで毎週第4金曜日の日中（11時～13時半）のみ営業してきたが、11月より、頻度を多くして、毎週木、金、土曜日も実施。昼は弁当を中心に販売し、夕方（15時半～17時半）も営業することとした。
- ・団体組織の検討（法人化あるいはLLP）。
- ・経営計画に照らし合わせ、店舗内装のツメを行う。
- ・スタッフ人材の強化（調理以外の面：接客等を中心に強化）
- ・宅配サービスに関して、有料制や会員制を導入するかどうか検討。

#### 【事業化への展望】

- ・事業化することが目的のプロジェクトとして、直面する壁を乗り越え、少しずつではあるが着々と前に進んできている。弁当を中心に採算性が合うようになってきた。本オープン時には家賃の金額もこれまでよりも多額になることから、チャレンジショップの頻度（週あたりの回数等）を多くし、今後の経営計画をじっくり練り込みたい。

#### 【その他参考となる事項】

- ・活動しているスタッフの友人が野菜を届けてくれることもあり、口コミからのネットワークが構築できつつある。



# 特定非営利活動法人映画保存協会（東京都文京区・台東区）

活動テーマ：谷根千アーカイヴの創設

## 谷根千工房と共同で、千駄木の蔵を活用してアーカイヴ準備中！

### 【活動地域の概要】

FPS の活動地域である「谷根千」とは、文京区および台東区に位置し、東京 23 区の中心地に近い谷中・根津・千駄木エリアを指す。今なお下町としての風情を残す、歴史と情緒が溢れる地域である。谷根千工房より発行された雑誌『谷中・根津・千駄木』が略して「やねせん」と呼ばれ、それがこの地域を表す言葉として定着した。谷中には多くの著名人が眠る谷中霊園があり、幸田露伴の小説『五重塔』のモデルとなった五重塔跡は都の文化財に指定されている。根津には社殿の 7 棟が国の重要文化財に指定される根津神社があり、境内はつつじの名所としても知られる。千駄木には川端康成、北原白秋、高村光太郎、夏目漱石、森鷗外など、多くの文人が住んだ歴史があり、大正 8 年に実業家の藤田好三郎氏によって建てられた「旧安田邸」は当時の佇まいのまま守られ続けている。谷根千は今、古き良きものを大切にしながら、この地域を愛する老若男女が息づく、魅力あふれる町として注目されている。

### 【団体設立経緯】

2001 年 9 月 25 日：映画保存に関する情報提供を行う任意団体「映画保存研究会 StickyFilms（スティッキーフィルムズ）」を結成。

2005 年 1 月 11 日：より実践的な映画保存事業を展開するため、任意団体「映画保存協会」を設立。

東京都台東区根津に事務所を構える。

2006 年 10 月 11 日：東京都の認証により、特定非営利活動法人「映画保存協会」を設立。

2007 年 4 月 1 日：東京都千駄木に事務所を移転。築 100 年の蔵に手を入れながら、地域活動に取り組み、現在に至る。



## 【活動の進捗状況】

### 1. 蔵の環境改善

本プロジェクトでは、大正時代に建てられた蔵の2階を改装して、そのスペースに地域雑誌「谷中・根津・千駄木」の取材資料を谷根千アーカイブズとして保存している。昨年度は床の補強と収蔵棚の設置、資料整理用の中性紙箱の購入などをおこなった。

今年度は、資料保護/湿気対策のため、蔵2階に屋上のソーラーパネルで動く換気扇を設置した(猛暑に入る前に完了させることができた)。その後、取材資料・書籍・スチル写真の整理などに着手している。

蔵の環境改善にも力を入れている。蔵1階は観音扉の開閉をスムーズにおこなうため、壁に音響機材用のケーブルを通す穴を開け、床下に通した。楽器の練習などの時間は、防音のために扉を閉めるようにしている。外観に関しては、板が剥がれ落ちて崩れていた壁面を全面的に修繕した。これは8月の最も暑い時期の大掛かりな仕事になった。また、照明がなく真っ暗だった蔵の入口に、青いランプを設置した。雑草の生い茂っていた中庭も、段階的に整備している。

春に蔵を改名(谷根千 記憶の蔵)したこともあり、注目を集めることはできたが、新たな案内版/表札等はまったく整備できておらず、今後の課題となっている。

### 2. 蔵の外部貸出

4月25日(日)「ダムとわたし」映画祭(自主上映会)

5月9日(日)「日本のワインのお話し会」主催:日本のワイン応援団ほか

6月26日(土)演奏会「黄金の共鳴 セイレーン光の誓い」

7月30日(金)「うろこの音」紙芝居とブラジル音楽

8月中 映像ドキュメント「Stray Sheep 迷えるNTT~藍染川・今昔~」の撮影

上記の他、映画保存協会/谷根千工房主催イベントや内部使用多数。

上映会開催時などは可能な限り売店の出店を依頼し(CRATER design works) 来場者に喜ばれている。楽器の練習は、蔵の所有者でもあり蔵に隣接する協和会女子会館の住民で、東京芸術大学高等部でヴィオラを専攻する学生に継続的に貸出をおこない、空いている時間の蔵スペースを活用していただいている。

「日本のワインのお話し会」で、山形のワイナリーの女性オーナー、岸平典子さんから次の感想が寄せられた。「蔵の中でワインの話だけでなく、蔵の家主である協和会の歴史(従軍看護婦から戦争を経て、派遣看護婦となり、法人化した歴史)を聞いて良かった。日本でワインを作り始めた歴史にも重なり感慨深かった」。

このように、この蔵に谷根千工房や映画保存協会が関わるようになるまでの経緯に興味を持ってくださる方が多い。

### 3. メディア掲載

【朝日新聞・8月23日(月)夕刊】オン&オフ 仕事おじゃまします「映像でも「キキガキスト」作家・地域文化研究者 森まゆみさん」の中で、谷根千 記憶の蔵 が紹介された。ほかにも森まゆみさんによる蔵の紹介事例多数。



#### 【想定外の事柄、当初予定との相違点】

9月、蔵の前室に雨漏りの被害があり、修理に予想外の出費が伴う見込み(3~10万円)。また同月、蔵1階左中央の床が抜け落ち、簡易補修を施すも、その上に椅子を置けないなど、不便かつ危険な状態になっている。

蔵の活用は思いのほか進展したが、活用されればされるほど劣化も起こるため、常に新たなメンテナンス費用が発生する。様々な活用方法があるが、2階の資料のことを考えると湯気の立つ料理はお断りする、楽屋は用意できない...等の不便もあり、使用ルールがなかなか確定できない。

文京区からの委託事業(地域映像アーカイブ)に7月から着手することになった。この事業の主体は文京区で、委託費の大部分は人件費だが、谷根千工房と映画保存協会という二団体の協力関係の強化が委託の実現につながった。蔵を拠点とするアーカイブズは、文京区地域映像と谷根千工房の過去資料の2本立てになったが、いずれもコミュニティの記憶を守り残す活動という意味で方向性が一致しており、相互に高め合う作用が働いている。また、活動拠点としての蔵の存在感も、日々増している。



#### 【今後の予定】

- ・10月5日 電気工事(事務所の玄関灯の新規設置、室内ペンダントライトの取り替え、故障していた電源コンセントの修理と増設など)
- ・10月21日 コミュニティ・アーカイブズの研究者、平野泉さん(立教大学共生社会研究センター職員/学習院大学アーカイブズ学専攻博士課程後期在学中)をお迎えし、地元の文化祭的なイベント=芸工展参加企画「D坂シネマ」の第一夜に上映会+トークイベント(「アーカイブズって何?」)を催す。聞き手は森まゆみさん。地元の皆さんに蔵2階の谷根千アーカイブズ存在を知っていただく機会とたく、また、資料の評価選別・編成記述方法などに対して、平野さんにご助言いただきたい。そのほか芸工展に関連して、写真展など蔵を会場にしたイベントが連日予定されている。
- ・10月23日 深谷シネマ(埼玉)のイベント「映像に見る街の記憶とまちづくり(仮)」で映画保存協会の地域活動を紹介
- ・12月上旬 谷根千工房の事務所完全移転
- ・2011年3月 第4回やねせん餅つき会開催



#### 【事業化への展望】

蔵の貸出に関して、宣伝を一切行わない中でも問合せは多く、貸出は順調だ。来年度以降は貸出情報をネットに掲載するなど、さらなる活用をはかり、修繕費用を賄いたい。

谷根千工房と事務所をシェアできることになり、映画保存協会は運営が格段に安定し、別途、小型映画部の作業場を設けてサービスを本格化することができた。

さらに、今年度7月より初めて非常勤職員1名を雇うことにもなった。以前に比べて本業に資金的な余裕が生まれつつあるため、ボランティアベースの蔵の再生に、今後一層時間を割くことができる見込みだ。

この状況を長期的に持続できるよう努力したい。

#### 【その他参考となる事項】

価値観を共有できる地域の市民団体や企業が事務所をシェアす



ることの利点は、予想していた以上のものだった。事務所開所については、初期費用や維持費に対する不安から一歩踏み出せない団体が多いかもしれないが、複数の団体がお互いの得意分野を生かし、設備を共同利用し、光熱費等のコストを削減したり補いあったりすることで、新たな可能性を次々と生み出すことができる。谷根千エリアは元来、文化活動を巡るネットワークが発達しており、人と人がつながりやすい地域ではあるが、今後もこの協力関係を続けていくと共に、蔵を舞台にした新たな「出会い」にも期待したい。



財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-5-11 新虎ノ門ビル 5F

TEL 03-3586-4869 FAX 03-3586-3823

<http://www.hc-zaidan.or.jp>